遠距離女としつこい男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠距離女としつこい男

【Ｎコード】

Ｎ７０５４Ｙ

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

遠距離恋愛中の女子高生につきまとうしつこい男子高生の恋愛物語。女の子目線で話が進んでいきます。

ちょっと変わったタイプ（？）の現代恋愛物語です。毎日更新していく予定でお届けします。

あなたが好きです

「好きです！愛してます！俺と付き合ってください！！」
「断る」
「なんで！？」
「・・・何回フラれたら気が済むの？」
「君がＯＫを出してくれるまでさ！」

はぁ・・・ウザイ。
何回告白を断ってもすぐに立ち直って告白してくる。
こいつアルツハイマーかなんかなの？

「何回告白しても一緒よ。私には付き合ってる人が居るんだから諦めてちょうだい」
「しかしそいつとはもう半年以上も会ってないんだろ？だったら俺にもまだチャンスはあるっ！」

いやいや、堂々と「俺と浮気してください」宣言されても困るし。
私には心に決めた人がいるのだ。
今は遠距離恋愛だから会えないだけで、心の底から愛していると言える。
多分向こうもそう思っているはずだ。

「もうチャンスなんて無いから。何回告白しても結果は同じだから。私の考えは変わらないから。私用事あるから。バイバイ」

しっかりと言い切って後ろを振り向く。
背後で何か言っているが、気にしないで歩く。

こいつが私につきまとい始めたのは、三週間前のテストのあとの学校帰りだ。
友達と別れて一人で歩いていた時。

「キミが吉野君子（よしのきみこ）さん？」
「え？はい。そうですけど・・・どちら様ですか？」
「俺の名前は長谷川隆夫（はせがわたかお）。良かったら俺と付き合ってくれないか？」
「・・・は？」

これが最初の告白だった。
私には遠距離恋愛している彼氏がいたので、申し訳ないと思いつつも丁重にお断りした。
しかしこれから毎日毎日学校帰りで一人になったところを告白され続けた。
最初の1週間は告白されたのも初めてだったので、断るのにも少し罪悪感を感じていたけど、こうも毎日告白されては断るのを続けていると罪悪感も何も感じなくなって来る。
毎回同じ場所で告白されるもんだから、2週間目は違う道を通ってみたけどやっぱりダメだった。
まるでストーカーのように私がいる道だけを選んで待ち伏せしている。
これはもう訴えたら勝てるレベル。
もしかしたらからだのどこかに発信機でも取り付けられているのかもしれない。
そして現在の3週間目。
もう違う道を通るのを諦めていつもの道を通り、相手の精神をブッ壊すために全力で断り続けている。
しかしあいつの精神力は底なしか？
何度断っても断っても学習していないかのようにつきまとってくる。

もしかして機械で出来ていて、学習するＡＩを搭載し忘れたのだろうか？
それなら納得がいくが、そんな近未来の話がある訳がない。
私はリアリストだからそんな話は信じたくもない。

「あ。忘れてた。メールしないと」

メールの相手はもちろん遠距離恋愛中の加藤正樹（かとうまさき）。
同い年の１７才で事情があって大阪へ転校してしまったのだ。
当時付き合っていた私と正樹は互いに別れるつもりはなくて、大人になったら会う約束をして遠距離恋愛を続けている。
メールや時々する電話だけが私たちをつないでいるけれど、私達の気持ちはいつも目に見えない何かでつながっていると信じている。
きっと正樹も同じことを思っているはずだ。
そう思いながら私は正樹へメールを送った。

あなたが好きです（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前の作品から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。

この作品から読んでいただいている方は、よろしくお願い致します。

なんやかんやでまた恋愛小説に落ち着きましたが、これからも拙い文章ですがよろしくお願い致します。

では次回もお楽しみに！

私と正樹

私、吉野君子と加藤正樹が出会ったのは高1の2月。
あまり友好の輪を広げない私の、唯一と言ってもいいこの学校での友達の照井明子(てるいあきこ)が風邪で休んだ日のことだった。
明子以外に話す相手があまりいない私は授業と授業の間の休み時間中は、窓側の真ん中の席でボケーっと外を眺めていた。
朝、明子にメールをしてみたけど寝ているのか、未だに返信はない。
病気は寝て治すのが一番だと思うから返信がないのは仕方がない。
今は昼休み。例によって、今も外を見ている。

「今日も雪がすごいや」

教室の中は暖房がついていてとても暖かいが、窓の外から見える風景は白一色だった。
今日はテレビの天気予報通りの猛吹雪である。
いつもなら上から下に降ってくる雪も、風のせいで右から左へと流れている。
この調子だと帰りの電車は全く動いていないかもしれない。
いや、北海道のＪＲはこんなことじゃ遅れないか。
そんなことを考えながら窓の外を流れていく雪を見ていた。

「あれ。キツネじゃない？」

ふと横から声をかけられた。
声がした方向を横目で確認してみると、窓の柵に手をついて外を見ている男子がいた。

「ほら。どっか行っちゃう」

そう言われて私は慌てて視線を外に向けた。
吹雪のため視界は激悪だが目を凝らして探す。

「どこ？」
「あの木の近く」

言われた木の近くを見てみると、確かに黄土色をしたキツネがいた。
初めて見たわけじゃなくて中学校の時も時々見たことがあったけど、
やはり見れると少し嬉しい。
私自身はこの学校に入って初めて見た。

「俺今年初めて見た」
「私も」
「おーい正樹！次移動教室だぞ！」
「うわっ！ちょっと待ってくれよ！ってわけで移動教室だから。吉野さん。遅れたらダメだよ」

そう言って友達のとこへ戻っていく男子。
どうやらボケーっとしていた私に移動教室のことを伝えに来てくれたらしい。
すっかり忘れていたけど次は理科室で実験をするんだった。
いつもなら明子が教えてくれるんだけど今日は居ない。
彼が来てくれなければ、私は授業開始のチャイムが鳴ってから慌てて移動することになっただろう。
ありがたき幸せ。
それにしても全然話したこともないただの同じクラスの女子に話しかけてくるなんて珍しい人だ。
理科室に向かいながらさっきの男子生徒について考える。
同じクラスなんだろうけど名前が・・・たしか『正樹』って呼ばれ

てたような気がする。
私は名前を覚えるのが苦手だった。

「あの、さっきはありがとう」

今日最後の授業の前の休み時間。
私は彼にさっきのお礼を言った。
私の席は窓側の真ん中ぐらいの席で、彼の席は廊下側の一番後ろの席だった。

「わざわざお礼？別にいいのに」

笑いながら、どういたしまして、と言う彼。

「だって・・・えーと・・・」
「ん？」

彼が不思議そうな顔をする。

「ごめん。名前聞いてもいい？」
「え・・・加藤です」

そりゃ驚くわな。
ほぼ一年間一緒に過ごしてきたクラスメイトの名前もわからないなんてどうかしてると自分でも思った。

「もしかして名前覚えてなかったの？」
「ごめん。私あんまり話さないから」

「いや、いいんだけどさ。でもなんかちょっとショック・・・」
あからさまに肩を落とす加藤君。
なんか・・・ほんとに申し訳ない。

「あ。冗談冗談！吉野さんは気にしないで！」
「なんで私の名前？」
「これが普通だと思うんだけどなぁ」
「私の普通とは・・・私がズレてるのね」
「かもね」

加藤君はそう言って笑った。

「これからもたまに話しかけてもいい？」
「加藤君がいいなら私はかまわないけど」
「ほんと！？良かったー。なんか吉野さんってちょっと近寄りがたい感じだったから断られたらどうしようかと思った」
「そんなに近寄りがたい？」

ちょっとショックだった。
普通に過ごしてるだけなのに。
いや、私の普通はズレてるんだっけ。

「ちょっとね。照井さん以外と話してるのは見たことなかったし、それ以外は頬杖ついて外見てるだけだったし」
「だって明子しか友達いないもの」
「そうなんだ・・・じゃあ僕と友達になってよ」
「そこは契や・・・いや、なんでもない。別にいいけど、友達になってどうするの？」

明子とは共通の話題があるからまだわかるけど、彼は特になにも接点がない。

「仲良くなろうよ。せっかく同じクラスなんだし」
「まぁそれもいいかもね。よろしく、加藤君」
「こちらこそよろしく、吉野さん」

これが私と正樹のファーストコンタクトだった。

私と正樹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

初めは結構のんびり進めていきます。
気長にお付き合いくださいませ。

次回もお楽しみに！

友達

学年が変わり、高校2年の4月。
学年が上がる際のクラス替えがあったけど、私は明子と同じクラスになれた。
加藤君とも同じクラスだ。
加藤君とは明子ほどではないけどそれなりに親しい関係になっていて、連絡先を交換したり私の趣味を打ち明ける程度の仲にはなっていた。
私はオタクである。
明子と友達になった時は

「ねぇ吉野さん」
「何？というか誰？」
「誰ってヒドイな。私は照井明子。そんなことより、そのケータイに付いてるのって・・・」
「え？わかるの？」
「まぁね。私も好きだし」
「へぇ。ちょっと意外かも」
「それのどんなところが好き？」

そんな感じで明子とは仲良くなった。
でもオタクであることは二人とも隠していた。
同じクラスにオタクっぽい集団がいるんだけど、あからさまに避けられていた。
時々「フヒヒw」とか「マジで萌えるよな！」とか大声で言ってるのを見ると、あんなのと一緒にされたくない気持ちが芽生えた。
どうしてあーゆー人たちはオタクアピールをするのだろう？
吹っ切れたというよりも、何かしらのオタクであることを自慢して

いるように見えて仕方がなかった。
そんなこともあるせいか加藤君にも隠していたんだけど、これからも友達でいるためには話しておかなければいけないと思いそれとなく話してみた。

「私オタクなんだ」
「へぇー。そうなんだ」
「・・・それだけ？」
「え？なんかごめん。突っ込んだほうがよかった？」
「いや、なんていうか、オタクだよ？」
「えーと・・・別にいいんじゃない？個性だよ。個性」

全然気にしてなかった。
むしろ喜んでた。

「これって僕しか知らないの？」
「まぁ明子は知ってるけど」
「じゃあ男子では僕だけ？」
「まぁそうなるね」
「エへへ」

なんかよくわからないけど、軽蔑されたりしなくて良かったと思った。
オタクのことを知っても全然態度が変わらなくて良かった。
加藤君はわりと誰とでも話すみたいで友達も多かった。
話しかけられても嫌な顔一つしないで楽しそうに話していた。
今回もクラス替えがあった直後なのに、クラスのほとんどの人の名前を覚えていた。
今も明子と三人でその話をしていた。

「え？普通じゃないの？」
「加藤君のいう普通ってハードル高くない？ハードルってゆーか棒高跳びの域なんだけど」
「照井さんはもう覚えてるでしょ？」
「名前は自然と頭に入っていくものですよ。加藤君や」
「つまりどういうこと？」
「まだ覚えてないってこと。で、君子（きみこ）は？」
「私に聞いちゃうの？」
「「ですよねー」」

三人で笑った。

こんな日が続くと思ってた。

「アンタ最近調子乗ってない？」

ある日、トイレに行った明子を見送った教室で同じクラスの女子何人かが私の席へ来て言った。
もちろん名前は覚えてない。
加藤君は他の友達とどこかに行っていた。
私は意味が分からず聞き返す。

「調子に乗ってるって？」
「最近アンタ正樹君と仲良いみたいじゃん。それが調子乗ってるって言うんだよ」
「それがどうかしたの？」
「そーゆー態度がムカツクんだよ！」

ガンッと机を蹴る。

その音にビクッとなって教室にいた人たちの視線が私の席に集まる。
しかしそれも一瞬で、みんな視線をすぐにそらす。
私は思った。
これがイジメってやつか。
実際に自分が当事者になるなんて思ってなかったから全然実感がなかった。
でも現に今、明子も加藤君もいないタイミング、つまり私が一人の時に狙ってきたってことはそーゆーことだろう。
からだはいつもよりぎこちない動きをしているけど頭は冷静だった。

「なんか言えよ」
「私と加藤君はただの友達・・・」
「アンタに無理矢理合わせてるだけだっての。それぐらい気づけよ」
最後まで言わせずに連れの女子が笑う。

「とにかく調子に乗りすぎんな。次は無いからな」
「君子？」

明子が教室に戻ってきた。
それを確認すると女子達は去っていく。
少しホッとした。

「どうしたの？なんかあった？」
「ううん。ちょっと話してただけ」
「そう？ならいいけど」

教室の異様な空気に気づいて明子が心配してくれたのに、私はごまかしてしまった。
それが全ての始まりだった。

友達（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

しばらく鬱展開が続きますが、あと数話の辛抱です。
お付き合いください。
今回は勢いだけじゃないんだからね！
ちゃんとラブコメにしてやるんだからね！

ということで次回もお楽しみに！

イジメ

あの日を境に私はやたらと絡まれるようになった。
一人の時に悪口を言われるのは当たり前で、すれ違いざまに足をかけられたり、上靴が片方だけ全然違うところにあったり、机の中に画ビョウが大量に入っていたりもした。
全部挙げるとキリがないけど、全部私が誤魔化せば隠せる範囲のイタズラだった。
しかし私は明子や加藤君に迷惑をかけたくなかったので隠し続けた。
明子も私と同じで学校には友達が居なかった（学校外にはいるらしい）から一緒にいることが多かったけど、それでも少しだけ明子が離れるタイミングを見計らってやられていた。
それでも私は明子にバレないようにしていた。
陰湿なイジメが始まって1ヶ月が経とうとしていた。

「君子。大丈夫？」
「え？何が？」
「何がって・・・なんか最近ビクビクしてない？」

ドキッとした。
できるだけバレないようにしていたのに無意識のうちに態度に出てしまっていたようだ。

「そんなことないよ。多分昨日見たテレビが怖かったからかも」
「そう？ならいいんだけど。なんかあったら言ってね」

そんなある日。
机の中に手紙が入っていた。
私は二人に気づかれないように恐る恐る開いてみた。

『今日の放課後、校舎裏に来い。来なければ照井にバラす』

校舎裏には学校の中からも、グラウンドからも全くの死角になっている場所がある。
多分そこに来いということだろう。
私は放課後、明子に適当な嘘をついて指示通りに校舎裏に行った。
明子にも加藤君にも迷惑はかけられない。
私が校舎裏についた時には誰もいなかった。
それから１０分ぐらい待った。
コツコツとローファーがコンクリートの地面を鳴らす音が聞こえてきた。
だんだん近づいてくる。
ついに私の視界に3人が入った。

「うわ。ホントにいるし」
「何の用？」
「勝手にしゃべるな！」

言いながら一人が蹴ってきた。
私は避けることができずに、そのまま左足に受けて膝を付く。

「お前な。いい加減にしろよ？私たちが忠告してやってるんだから大人しくしてろよ」
「だからただの友達・・・」
「しゃべるなって言ってるだろ！」

また私を蹴ってきた。
今度は一発だけじゃなくて二発、三発と続けて蹴る。
私はついに耐え切れなくなってその場に倒れる。

「なんかむかついてきた。お前の髪って私の髪型をかぶってるんだよな」
「たしかに！」
「ねぇ切っちゃおうよ。ほらハサミもあるし」
「準備いいなぁ。よし。これから散髪してやるよ」

ハサミを持っていない二人が私を無理矢理起こし、両腕を押さえて壁に立たせる。

「ちゃんと押さえとけよ」

髪の毛にハサミが近づいてくる。
髪で済むなら安いもんだと思った。
きっと切ったら満足してイジメが終わるかもしれない。
そう考えていた。
しかし現実はそんなに甘くなかった。
腕を押さえていた一人が言った。

「こいつの制服切っちゃえばもう学校来ないんじゃね？」
「たしかに」
「お前頭いいな。じゃあ散髪から制服の裁断にするか」

髪の毛に迫っていたハサミは方向を変えて、スカートの裾へと向かっていった。
制服を切られたらバレちゃう！
親にも隠してるのに！

私は必死に抵抗した。

「こいつ急に暴れやがって！」

「おとなしくしろ！」

両腕を押さえられながらも必死に抵抗する私。

しかしハサミは止まらない。

ついにはスカートを手で押さえながらハサミを入れてくる。

「何やってる！」

その声に反応して全員が声のした方向に目を向けた。

ハサミを持った女の後ろに加藤君が見えた。

「加藤君・・・」

「吉野さん！？」

驚いて目を丸くする加藤君。

三人はハサミを後ろ手に隠すと、何もなかったかのように私を開放した。

「・・・何してるの？」

「・・・・・・」

私は答えられない。

「私たちと遊んでたんだよ。なぁ？」

「そうそう！」

「たしかに！」

三人は口々に言った。

「そうなの？吉野さん？」

何も言えずにただ立っているだけの私。

「吉野さん。こっちに来て。一緒に帰ろう？」

フルフルを首を振る。

「ねぇ。正樹くん。もうこんなやつに関わるのやめなよ」

一人が言った。

「どうして？」

「だってこんな根暗で地味なやつと、正樹くんみたいな元気な人は関わっちゃいけないと思うんだ」

「たしかに」

「私もそう思う！」

「でも僕は吉野さんの友達だし」

「友達って・・・私たちは友達じゃないの？」

「友達だけど、吉野さんも友達だから」

「じゃあ私たちと吉野さんならどっちを選ぶの？」

私のほうを見てくる加藤君。

「吉野・・・さんかな」

「加藤君・・・」

途端にしおれた様子になる三人。

「わかった。こいつのことが好きなんでしょ！」

ハサミを持っていた女が叫んだ。

他の二人も驚いている。

私はドキッとした。

「・・・うん」

「え・・・」

加藤君は私を見ながら頷いた。

「マジかよ・・・帰る」

「ちょっと待てよ！置いてくなよ！」

「たしかに！」

そう言って三人は加藤君の横を通って去っていった。

イジメ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

一応次で過去編が終了します。
今のところ君子目線でお送りしていますが、真の主人公は最初に出てきたあの男ですからね。
期待していてください。

では次回もお楽しみに！

転校

私と加藤君はその後のなりゆきで付き合うことになった。
って言っても、加藤君はみんなに内緒にしておいて欲しいらしく、
まだ誰にも言ってない。
もちろん明子にも。
そしてその次の日からイジメは無くなった。
というよりも今まで以上に加藤君が近くにいるようになったので、
イジメができなくなったと言う感じだった。

そして私と加藤君が内緒で付き合い初めて1ヶ月ぐらいが経ち、6月も終わりに近づいてきたある日。
その頃には、二人の時は互いに名前で呼び合っていた。
明子が掃除当番で遅くなるので、学校帰りの駅までの道を二人で歩いていた時だった。

「え？転校？」

正樹が大阪へ転校するということを聞かされた。
転校は前から決まっていて、夏休みには引っ越してしまうらしい。

「そうなんだ・・・」
「ごめんね。なかなか言い出せなくて」
「ううん。私たちはどうなるの？」
「どうしたい？」

そう聞かれると困る。
私は遠距離でもなんでもいいから正樹との関係を続けたかった。

「遠距離とか・・・ダメかな？」

正樹が迷惑ならと思ったけど聞いてみる。

「遠距離ってつらいよ？なかなか会えないし、何かあってもすぐに行けないし」

「でも気持ちがつながっていれば大丈夫だよ！」

「・・・そうだね。じゃあまた大人になったら会おう！」

そう約束した。

そして正樹は7月の終業式の次の日には引っ越していった。

私と明子は二人で空港まで見送りにいった。

「見送りなんていいのに」

すこし照れたように微笑む正樹。

「そんなこと言わないでよ。最後かもしれないんだから」

「それフラグ」

明子が縁起でもないことを言う。

「アハハハ。じゃあね。照井さんも君子も元気でね」

「うん。メールとかするね」

「加藤君も頑張れよ！」

搭乗口へと姿を消していく正樹君を見送った。

その帰りの電車の中。

「君子と加藤君って付き合ってたんでしょ？」
「え！？なんで知ってるの！？」
「そんなのバレバレだよ。見てたらわかるって」
「バレてたのか・・・」

テへへと頭をポリポリとかく。

「さみしくないの？」
「そんなこと・・・ないよ・・・」

しばらく正樹に会えないと思うと涙が溢れてきた。

「ほら。俺の胸を貸してやるよ」
「誰それ・・・」

明子の冗談にツッコミを入れて乗り換えの駅まで私はずっと泣いていた。

そして今、高校3年の5月。
正樹とはあれ以来ずっと会っていないけど、心が通じ合っていると信じて遠距離恋愛を続けている。
最初のうちはどうしようもなく会いたくなったけど、そういう時は正樹に電話をしたりして気を落ち着けていた。
こんなに会えないのが辛いものだとは思っていなかった。
会えない。触れない。声が聞けない。顔が見れない。
そんなこと愛があれば何とでもなると思っていたけど、正直会いに

いきたい。
でも約束は約束だ。
いつか大人になったら会うその日まで、頑張って人生を過ごしてやる。

「俺と付き合いませんか！？」
「断るっ！！！！」

こいつも振って振って振りまくってやる！！

転校（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

やっと過去編が終わりました。
次回からはストーカー編です。

次回もお楽しみに！

ストーカー

変な男を振り続ける生活を続けて、現在６月。
５月のＧＷの休み明けから付きまとわれていたから、かれこれ１ヶ月になる。

「付き合ってくれ！」
「断る！何回言わせるの！？」
「何回でもさ！」

もうホントにこりないやつ・・・

「なら聞くけど、私のどこが好きなの？」
「どこって言われたら困るんだが・・・全部だ！」
「はいダメー」
「なんでだよ！」
「全部ってことは曖昧すぎるから」
「謀ったなー！シャア！」
「君の父上がいけないのだよ。って何言わせるんだ！とりあえずダメだ！」

振り向いて帰る。
なんか調子狂うな。
あの人、私のオタクネタのツボをことごとくついてくる。
やれやれだぜ。
家に帰ってメールを送る。
最近正樹は忙しいらしく、メールはたまにしか返ってこない。
でも私と正樹は心が通じ合っているから問題ない。

次の日の朝。

「最近加藤君とどう？」

隣の席に座っていた明子が声をかけてきた。
明子とは3年になっても同じクラスで、しかも今は席が隣同士だ。

「なんか忙しいみたいであんまり連絡とってないかな」
「ふーん。じゃああの変な奴は？」
「あいつは相変わらずつきまとってくるよ。ホント勘弁して欲しいよ。こないだもガンダムネタで攻めてきて、思わず乗っちゃったもん」
「マジで？すごいなー。そこまで的確に君子の趣味を突いてくるとはなかなかやるな。ゲルググと名付けようか」
「なんでゲルググ！でもホントに的確なんだよねー。どっかで会ってるのかなぁ？」
「私に聞かれても困るわ」
「だよねー」
「よーし席つけー」
「あ、先生だ」

先生が来たので会話を中断して授業に集中した。

そして放課後。

「アナタノコトガー好キダカラー！」
「・・・・・・」
「ちょっと！無視！？無視は勘弁してください！」

「もう何回来れば気が済むの？」
「あなたが僕の気持ちに答えてくれるまでです」
片膝をついて手を差し伸べてくる。
「だが断る」
その手をバシッと払って歩き出す。
「断らないでよ！加藤よりも俺のほうが絶対にいいって！」
ピタッ。
思わず止まった。
「どうして正樹を知ってるの？」
「あ・・・いや、その・・・」
「そんなことまで調べてるの？サイテー」
後ろで何か言っているが無視して歩き出す。
ただのストーカー気味の男だと思ってたのに、ホントのストーカーでしかも正樹のことを悪く言うなんて許せない。

次の日。

ストーカー男は現れなかった。
ついに観念して告白するのをやめたのか。
長かった。やっぱり昨日の一言が決定的だったんだと思う。
我ながらすごい冷たい声で言ったと思う。

あんなやつに同情なんてする価値も無い。

そのまた次の日。

またストーカー男は現れなかった。

更に一週間。

あれから一度もストーカー男は現れなかった。
私にとってはこれが普通なんだろうけど、少し罪悪感を感じた。
いや、ホントに少しだけだよ？１ミクロンぐらいだよ？
この話を明子に話した。

「いいことじゃないか」
「そうなんだけど・・・」
「なになに？もしかしてもしかしてちょっとさみしいの？」
「そ、そんなことないよ！」
「必死になるところがまた怪しいでござる」
「ちょっとからかわないでよー！」

別に異常から通常に戻っただけなんだから問題ないはずだ。
それに私には正樹が・・・

「正樹・・・何してるんだろ・・・」

あの男のせいで忘れてたけど、ここ最近正樹から連絡がないんだっ

た。
電話は無理でもメールぐらいくれたらいいのに。
まぁ今年は受験もあるから授業とか大変なのはわかるんだけどちょっとさみしいなぁ・・・

ストーカー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかいただけると発狂してます。
ここまでテンプレ。

こんなストーカーなら楽しそうですね。

次回もお楽しみに！

公園

ストーカー男が居なくなってから丸二週間。
一つの厄介だった問題が解消された私は、正樹のことで頭がいっぱいになりつつあった。
どうして電話くれないの？
どうしてメールの返事をくれないの？
今なにしてるの？
時々ひどくなると、夜に勉強をしていて泣き出してしまうほどだった。

「でも正樹と私は・・・」

本当に正樹と私は心が繋がっているの？
そんなことまで考えてしまう私はダメな子だ。
あの時私のことを助けてくれたんだから、今度は私が頑張らなきゃ。
我慢我慢！

「君子・・・大丈夫？」

ある日の朝、学校で明子に言われた。

「あんた泣いたでしょ？」
「なんでわかるの？」
「だって目の周り真っ赤だよ。なんか辛いことあった？」
「まぁ・・・ちょっとね」
「私で良ければ話聞くよ」

私は明子に甘えて話を聞いてもらうことにした。
いい友達を持ったと思った。
そして放課後。
いつもの帰り道とは少しそれたところにある、公園のブランコに二人で腰掛けた。
通学路とは少し離れているから、他の人が来ることは滅多にない。
私は正樹のことについて色々話した。

「もしかしてだけどさ、加藤君ってもう別れたいんじゃない？」
「やっぱりそう思う？」

私も少し思っていた。

「でも連絡ぐらいしてくれてもいいのにね。と私は思うけど、君子から電話はしたの？」
「してない。なんか怖くて」
「そりゃ怖いかもしれないけど、そのままズルズル引きずっていくよりはいいと思うけどなぁ」
「うん・・・」

明子はブランコをこぎながら私の返事を待っている。
でも私はなかなか踏ん切りがつかなかった。
正樹のことはすごい好きだ。
それに正樹がホントに忙しいから連絡できないのかもしれない。
でもいくらなんでもこれはおかしい。
もしかしたら事故にあって連絡ができないのかもしれない。
でもだからといって電話ぐらいは使えるはずだ。
いろんなことを頭で考えてしまう。
これが遠距離恋愛なのだ。
相手からの情報がないとなにもわからなくなって、結局自分自身で

解決せざるを得なくなって、どんどんどんどん悪い方向へと考えてしまう。

「明子・・・私どうしたらいいんだろう・・・」

「君子・・・」

答えを待っていたはずの明子も、私の表情を見て返す言葉がなくなってしまったようだ。

「なら俺に任せてくれないか！」

突然、公園の中に声が響いた。

何事かと思って公園の入口を見てみると、あのストーカー男が立っていた。

「何あれ？」

「えーと、照井明子さんだったかな？はじめまして。長谷川隆夫と言います」

「あ。ご丁寧にどうも」

「おじぎしないでよ！明子！あいつが例のストーカーよ！」

「なんと！やっぱり変態紳士っていたんだ！」

変なところに驚いている明子を横目に、ストーカーに声をかける。

「なんの用？」

「そんな冷たい目で見ないでくれ」

「明子。帰りましょう」

「だから無視はやめてって！」

「なんか言ってるけどいいの？」

「いいのよ。いつものことだから。帰りましょう」

「加藤の話だろ？」

唐突に話を戻すストーカー。

「まさか立ち聞きしてたの？」

「違う。うちはそこだ」

彼の指さした方向を見ると、公園の周りを取り囲むような形で生えている木の隙間から家が見える。

あそこからならここの公園はばっちり見えるわけだ。

「たまたま窓の外を見たら、ブランコにすごくしょんぼりした吉野君子がとお友達が座っているではないか。こんなにしょんぼりさせるのは加藤のやつしかいないと思った。そして家から出てきて今に至るというわけだ」

「説明乙。つまりあんたは加藤君について何か知っているということ？」

「まさにそのとおりだ」

自信満々に胸を張るストーカー男。

ホントに大丈夫なのだろうか？

公園（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

真実

「じゃあまずはウチにくるか？」
「行かない。ここで聞く」
「さいですか」

なぜかしょんぼりするストーカー。
すぐに背筋を伸ばして気を取り直して話し始めた。

「俺には大阪に友達がいるんだ。この間のＧＷにその友達が大阪案内をしてくれるっていうから、飛行機に乗って行ってきたんだ」

急にストーカーの大阪旅行記が始まってしまい、私と明子は顔を見合わせた。
アイコンタクトの結果、何か意図があるのだろうということで大人しく聞いていた。

「・・・・・で、そんなこんなで大阪に着いた俺は、空港で待っててくれた友達と一緒に観光して一日目を友達の家に泊まった」
「これちゃんと正樹に関係あるんでしょうね？」
「まぁのんびり聞いててくれ。そして次の日だ。友達が紹介したいやつがいるって言うから、一緒にそいつと待ち合わせている駅まで行ったんだ。なんでも去年の夏休み明けに転校してきて、俺の友達と仲良くなったらしい」
「夏休み明けって・・・」
「そうだ。そいつが加藤だった。加藤はすごい馴染みやすいやつで俺とも仲良くなった。そして俺たちはまた観光・・・というよりも道頓堀に遊びに行った。さんざん遊んだあとに夕食をファミレスで食べてたんだ」

「で、長谷川君は北海道からわざわざ来たの？」
「まあな。こいつが観光案内してくれるって言うからな。飛行機代だけで良いっていうからこいつの家に泊まった」
「まぁ最終日に全額請求するけどな」
「お前鬼か！」
「僕も北海道出身なんだよー」
「へぇーそうなのか。どこらへん？」
「えーと札幌の端っこらへん」
「マジで？俺もそっちの方だ」
「ホント！？もしかして学校も一緒だったりして」
「俺は相野高校(あいのこうこう)だ」
「うそ！同じじゃん！」
「マジでか！！何組！？」
「9組」
「あーなら仕方ないよな。俺1組」
「あー反対側だもんねー。そりゃ会わないかもねー」
「そういやこいつ彼女置いてきたらしいぜ」
「だから彼女じゃないってば」
「どういうことだ？」
「ほら。話してやれよ」
「わかったってば。いじめてるところを助けたら勢いで付き合っちゃった彼女がいたんだ。でもその時には転校も決まってたし、それまでなら別にいいかなーって思って付き合ってたんだ。で、その転校するって言った時に遠距離でもいいって言われちゃって。僕はそんな気はなかったんだけど、向こうは別れる気はなかったみたいで・・・。で毎日のようにメールがくるんだけど、最近はもう返事も返してないかな」

「お、お前はそいつのこと好きじゃないのか？」
「もともと友達以上ではなかったよ。助けたのだってたまたまだし。友達が困ってたら助けちゃうでしょ？」
「まぁ確かにそうだが・・・なんて子なんだ？」
「同じ９組の・・・って今は多分違うけど。吉野君子って知ってる？」
「いや、知らない」
「こんなこと言わないでよ。これは僕たちの秘密だからね？今だから言える～的なやつだよ」
「もちろんだよ！な。隆夫？」
「も、もちろんだ」

一通り話したストーカーがこちらへと目を向けた。
話しながらジェスチャーも加えていたのに、なぜかわかりにくかった。
でも正樹のことだけはちゃんとわかった。

「正樹はわたしのことなんとも思ってなかったんだ・・・」
「君子・・・」
「・・・私なにしてるんだろ？」
「まぁこっちに戻って来て、早速吉野君子を探したんだ。顔がわからないやつを探すのは大変だった」
「ならなんであんたがストーカーまがいのことをしてたのよ」

君子がストーカーに向かって言う。

「少しでも加藤のことを忘れてほしくてな。俺は不器用だからそんな方法しか思い付かなかったんだ。吉野君子を見つけた時、すごいつらそうな顔をしていたのを覚えている」

見すぎじゃない？とも思ったけど、そんな軽口を叩けるような心情ではなかった。

「だから俺は変なやつを演じることで吉野君子につきまとったんだ」

「あんたいいやつだな」

「まぁ困ってるやつがいたらほうっておけないんだ。それに迷惑をかけたのは事実だ。すまなかった」

「いやいや、あんたは悪くないよ。むしろ感謝すべきだ」

明子とストーカーの二人で話が進んでいく。

正樹がホントにそんなこと言ったの？

信じられない。

私は正樹のことが好きだったのに・・・

私の気持ちはどうなるの？

「・・・嘘でしょ？」

「「え？」」

「嘘なんでしょ？正樹がそんなこと言うわけないもん。ねぇ、あなたが勝手に作った話なんでしょ？」

ストーカーの肩をつかんで前後に揺らす。

「残念だが真実だ」

真実（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

だんだんと話が暗くなってきました。

ということで次回もお楽しみに！

ぐちゃぐちゃした気持ち

残酷な真実を叩きつけられた私は、いつのまにか家で寝ていた。
どうやって帰ったかもわからないぐらい記憶がぐちゃぐちゃになっていた。
もしかして全部夢だったのかなぁ？
そう思ってケータイを開いてみると、返事が返ってきていないメールの履歴。
それだけで現実に引き戻される。
また悲しくなる。
必死にあの話を嘘だと信じたい自分がいるのだが、現状を見る限りでは真実を受け止めるしかないような気がしてくる。
信じたくないのに信じるしかない。
正樹を信じている自分を信じたいのに、信じれる要素がない。
こんなに遠距離恋愛が辛いものだとは思わなかった。
もし遠距離じゃなければ、今すぐ会いに行って事情を聞けるのに・・・
話を聞きたい。声が聞きたい。本当のことを聞きたい。
片方が拒否するだけで全部できない。
心どころかケータイすらつながってないじゃないか。

「こんなおもちゃなんかっ！！」

壁に向かって思いっきりケータイを投げつけた。
開いたまま投げたせいで変なぶつかり方をし、上下を繋ぐ部分が壊れて綺麗に二つになった。
一瞬やってしまった、とも思ったけど、どうせ連絡も来ないんだしもう私には必要なかった。
制服を着たまま布団の中に潜り込んだ。

次の日。

朝になってお母さんが起こしに来たけど、頭が痛いと嘘をついて学校を休んだ。
両親は共働きのため、昼間は誰も家にいなかった。
静かな家の中でその日は布団の中に潜って、一日中沈んだ気分のまま過ごした。

その次の日。

また嘘をついて休んだ。
お母さんは病院に行くように言ったけど、寝てれば治ると言ってまた布団の中で過ごした。

そのまた次の日。

土曜日のため学校は休みだった。
お母さんが朝に様子をみに来たけど、また仮病を使って布団に引きこもった。
だんだんと気持ちが収まってきたけど、なんとなく布団から出たくなかった。

「お姉ちゃん大丈夫？」

顔を向けると、中学1年の妹の一美（かずみ）がドアから部屋をのぞき込んでいた。

この間まで小学生だったのに、今はもう中学生だ。
時が経つのは早いなぁ。

「大丈夫だよ」
「あのね。明子さんからメールがきて、お姉ちゃんのケータイに繋がらないから様子を見てくれって言われたの」

明子と一美はメールアドレスを交換している。
無理矢理明子が聞いたんだけどね。
リアル妹がほしかったらしい。

「ごめんね。大丈夫って言っといて」
「わかった。お姉ちゃんのケータイは？」

そういえば壊れたんだっけ。

「あれ？それ・・・ケータイ壊れたの？」
「あっ！」

一美があざとく床に落ちたケータイを見つけて拾い上げる。
慌てて布団から出てケータイを取り返そうと立ち上がるが、近頃の布団生活のせいでからだがバキバキいって動きにくくて一美までたどり着けない。

「お姉ちゃん・・・大丈夫？」
「ちょっと返して・・・」
「そんなことよりヒドイ顔だよ？」
「・・・メイクしてないからさ」
「お姉ちゃんメイクしないじゃん。お母さん呼んでこようか？」
「大丈夫だから！お母さんには言わないで！」

つい大声を出してしまった。

「・・・わかった。なんかあったら言ってよね。私たち姉妹なんだし」

「・・・うん。ありがと」

ケータイを私の手に置くと、一美は部屋から出ていった。

話のわかる妹でよかった。

昔から小さいくせに空気の読める妹だった。

自慢の妹だ。

「はぁ・・・どうしよ」

もうこれだけ休んだりしてると部屋から出にくくなっちゃったなぁ。

きっと明子も心配してるみたいだし。

そろそろ学校にも行かないとって思うけど、正樹のことを考えるとすごい辛くなってくる。

「お姉ちゃん」

閉じたドアの向こうから一美の声がした。

「何？」

「これから明子さんたちが来るって」

「え？明子に言ったの？」

「何も言ってないよ。言ったらお姉ちゃん怒るでしょ？」

「そっか。ごめん」

「別にいいよ。明子さんから伝言。私が行くまでに風呂に入ったり歯磨いたりとかしとけ！だって」

「・・・わかった。ありがと」

私はシャワーに入って歯を磨いてさっぱりした。
そしたらお腹が減ってきて台所で冷蔵庫を漁ろうとしていたら、お母さんがおにぎりを作ってくれた。
それを部屋に持っていき、明子が来るまで食べながら待っていた。
しばらくしてインターホンが鳴った。
妹が出たらしく、部屋まで明子を案内してくれた。

「なんであんたもいるの？」

私の部屋の前にいたのは、明子だけじゃなくてストーカー男も一緒だった。

「あのあと気になってたんだが、吉野君子がなかなか学校に来ないから困っていたんだ」
「だから今日お見舞いついでに連れてきたの」
「一応女子高生の部屋なんだけど・・・」
「大丈夫だ。俺は気にしない」
「私が気にするっつーの！！」

ぐちゃぐちゃした気持ち（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかいただけると見えないところで激しく踊り狂います。

なんか沢山書いてる気がするんですがまだ一桁話なんですねー
多分そろそろ鬱ターンが終わるはずです。
なんかデジャブ・・・

次回もお楽しみに！！

決意

「ちょっと！じろじろ見ないでよ！」
「見ていない。マンガのタイトルを見ていただけだ」

部屋に入るなりジロジロとストーカーが漫画をおいてある棚を見ている。
私は勉強机の椅子、明子はベッドを背もたれがわりにして床、ストーカーにはクッキーの大きいクッションを貸して本棚の前へと、それぞれが座った。

「意外と少ないんだな」
「「！？」」

私と明子はびっくりして顔を見合わせた。
女子高生の部屋にしては多いと思っていたんだけど、少ないとか言われたのは初めてだった。
明子情報によると『私が今まで見てきた女子高生の中でも一位二位を争うような多さだ』ということだった。
特大の本棚２つ＋αがあってもまだ少ないと言うのか。このストーカーは。

「そ、そんなに少ないの？」
「あ、いや、吉野君子のあのネタの引き出しの量からしたら少ないなと思っただけだ」
「そーゆーことか。私はガンダムとかはレンタルしたりして見ただけだからさ。でもジョジョは全部持ってるよ」
「あぁ。俺も全巻持ってる」

私にとってジョジョは心のバイブルだ。
しかもこいつもジョジョラーだったとは。

「だよね！面白いよね！・・・って何しにきたんだ！」
「アハハハハ！！」

明子が突然笑い出した。

「な、なにさ！」
「いや、思ったより元気そうでよかったよ」

目を拭って笑いながら明子は言った。
そういえば落ち込んでたことを一瞬忘れてた。

「・・・うん。まぁね。来てくれてありがと」
「もう大丈夫なの？」
「大丈夫かって言われると微妙だけど・・・そりゃ正樹のこと思い出すとちょっと悲しくなるし、泣きたくなるよ？でも今日だけで明子にストーカー男に一美にお母さんまで心配してくれてさ。こんなに迷惑かけてるようじゃダメだと思ったんだよね。だから正樹のことはもう忘れるよ。あ、でも忘れるっていうのは無理だけど、次に会ったらぶん殴ってやるぐらいの気持ちで生きていくよ。ってさっきおにぎり食べながら考えてたんだけどね」
「それでこそ私の君子だ！」
「ごめんね。明子」
「気にすんな」
「あとストーカー男もありがとね」
「俺も気にするな。あとストーカー男って言うのはやめてくれ」
「だって名前知らないんだもん」
「名前知らないって・・・何回も名乗ってるだろ」

「だって興味なかったんだもん」
「なら・・・今はあるってことか？」
「・・・ちょっとね」

・・・恥ずかしいこと言わせんな。アホ。

「そうか。長谷川隆夫（はせがわたかお）だ。よろしくな」
「長谷川ね。よろしく。私は吉野でいいよ」
「吉野だな。じゃあ俺と付き合ってくれ」
「だが断る！」
「そうか・・・なら友達としてよろしくな」
「・・・ホントに好きなの？」
「いや、特になんとも思ってないかな」
「「そうなの！？」」
「まぁ知り合い以上恋人未満かな」
「なんなんだよ・・・」

こいつにちょっと興味を持ってしまった私がちょっと恥ずかしいよ！

「あれ？君子？顔赤くな～い？」
「そ、そんなことないよ！」
「やっぱり吉野はちっちゃくてかわいいなー」
「ちっちゃくないよ！ってゆーかちょいちょいネタを挟むな！！」

三人でアハハハと笑いあった。

この出来事をきっかけとして、私はストーカー男・長谷川隆夫に好意を持つことになった。
念のため言っておくけど、別に好きになったわけじゃなくて、興味

をもっただけで恋愛感情とかはとくにないからね。
ツンデレじゃないからね！

決意（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

さてさて。長かった鬱ターンも終了となります。
次の話からは僕の暴走回（ラブコメ展開）となります。
鬱のターンはまたしばらく間を置いてからにしようかと。

というわけで次回もお楽しみに！

3組と8組

6月3週目
相野高校3年8組出席番号38番吉野君子。
数字だけ書くと3838となっていてとても覚えやすい。
いや、そんなことはどうでもいい。
今日は明子と長谷川にこの間のお礼も兼ねて何かを奢ろうと考えている。
明子には簡単に放課後の約束を出来たけど、問題は長谷川だ。
あの日、クラスを聞いたところ3組らしい。
同じ学校と言うのはなんとも驚きだった。
まぁ2年の時は1組と9組という反対のクラスだったみたいなので知らなくても仕方がない。
うちの高校は玄関が二つある。
東玄関と西玄関があってどちらからも入ることができる。
靴は玄関にある空いている靴箱のどれを使ってもいいことになっている。
なのでマンガとかでよくある「下駄箱にラブレターが！」っていうのとは全くもって無縁な学校だ。
そして横長の学校なので階段も二つある。
1組から3組は西玄関と西階段、7組から9組は東玄関と東階段を主に使っていて、4組から6組はどちらか好きな方を使っていた。
なので西と東の使用者はそれぞれのクラスとは全く関わりがない人間もいるということになっていた。
私たちと長谷川も例によって関わりがない人間の一人だったというわけだ。
そして今私は長谷川のクラス・3組の前に立っている。
他のクラスに行くのって初めてだから結構緊張するな。
勇気を振り絞ってドアの前に立って長谷川を呼ぶ。

「長谷川！！・・・くん・・・います・・・か？」

どんどん声が小さくなった。
みんなの視線がこっちに集まるんだもん。
やっぱりお礼なんてやめておけば良かった。

「あれ？吉野じゃない？」
「たしかに！」

声の方を見ると2年の時に私をいじめていた3人がいた。
一瞬からだがブルっとした。一人がこっちに歩いてくる。
あの時は正樹が近くにいたから平気だった。
でも今はもういない。
逃げ出そうとしたけど、私のからだは凍ったように感覚がなくなっていた。
まさしく蛇に睨まれた蛙状態。

「吉野。あの時はゴメンね。あたしもまだ子供・・・」

謝られたってなんにも変わらない。
自分は少し楽になるかもしれないけど、相手は一生トラウマになるくらいのダメージを受けているってことをわかってない。
イジメとはそーゆーもんだ。

「吉野？」

ふいに後ろから散々聞いていた声が聞こえた。
動かないからだでぎこちなく後ろを振り返ると長谷川が立っていた

「あ、は、長谷川」

やっとのことで声が出せた。
でも多分もうここでは声は出せないような気がした。

「どうした？何か用か？」

さっきの元いじめっ子が長谷川に何かを言っている。
私・・・正樹のことで少しは強くなったと思ったんだけど、少し思い上がっていたみたいだなぁ。
全然動けないししゃべれない。
結局ぐるっと一周しただけで、根本的には何も変わらなかったのかもしれない。

「吉野。ちょっとこっち来い」

長谷川が私をじっと見る。
いじめっ子がまだ何か言っているのを無視して、長谷川に手を引かれてその場を離れる。
そのままされるがままに連れて行かれた先は、東階段横の自販機があるホールだった。

「ここならさっきの廊下よりは人は少ないだろ」
「あ、ありがと」
「そんなことよりどうした？なんか用か？」

長谷川は何も事情を聞かないでくれる。
わざとなのかそれとも本当に気にしていないだけなのかわからない。
でもそれが今の私には心地よかった。
凍っていたからだが溶けていったのがわかった。

「あ、あのね。この間のお礼がしたくて」
「お礼？あれはお見舞いに行っただけだから別に何もいらないぞ」
「そういうわけにもいかないの！」
思わず食ってかかる私の頭を長谷川は手で押さえる。
「そこまで必死になるなよ。で、何してくれるんだ？」
「なんか好きなもの奢ってあげる」
「なんかって言われてもな・・・俺欲しいものは自分で買うから他人からもらったものは使わないぞ」
人が奢ってあげるって言ってるのに、こいつやっぱり変な奴。
ってゆーかこんな人間初めて見た。
普通奢ってくれるんなら奢ってもらうのが常識じゃん。
「えー。なんか奢りがいのないやつだなー」
「えーとか言うな。そんなにお礼がしたいのか？」
「だって迷惑かけっぱなしだったし、私のためにあんなにいろいろしてくれたわけでしょ？」
「それはそうだが、別にお礼が欲しいとか感謝して欲しいとか思ってやったわけでなくて、俺がしたいとおもったからやっただけだ。だから気にしないでくれ」
こうなったらもう意地でも奢ってやる。
私は目的を『奢ってあげる』から『何がなんでも奢ってやる』にシフトチェンジした。
「そんなこと言わずにさ。何か奢らせてよー」
「うーん・・・そこまで言うならひとつだけお願いしてもいいか？」

「さぁなんでも言いなさい」

やっと折れてくれた。

思わず笑みが溢れてしまう。

「俺と普通にいろんな話をしてくれないか？」

3組と8組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

この回からラブコメ展開を増やしていきたいと思ってます。
気分が乗らなくて無意味に書き溜めを投稿してるのは内緒です。

次回もお楽しみに！

待ち合わせ

私が長谷川に頼まれたのは『一緒にオタトークがしたい』と言うことだった。
あー見えて長谷川は友達付き合いが下手くそらしく（特に意外じゃなかった）、あまりオタトークをしたことがないらしい。
でも私をストーキングしてる時に垣間見せた、あのオタクならではの返しが気に入ったらしく大絶賛していた。
そりゃネタで振られたらネタで返すのが常識だしね。
しかも真正のジョジョラーに出会ったということもあって、一回腰を据えてじっくりと話をしたかったとのこと。
その話を教室に戻ったら明子にした。

「うはっ。やりおる。長谷川やりおる」
「どういうこと？」
「これで君子に好意が無いってゆーのがすごいな」
「！？」
「私はお邪魔しないから楽しんでおいでよ」
「ちょっと！一緒に来てくれないの？」
「だってジョジョラーじゃないし」

つまり放課後に約束した私からのお礼は、私と長谷川のデート（長谷川はそんなこと思っていない）ということになった。
言われてみればそうだよね。
放課後話がしたい→男女二人きり→カップルにしか見えない→はたから見ればデート
こりゃ大変なことになった。
私だってまだ長谷川のことを好きになった訳じゃないし、長谷川だって私に好意が無いっていうのを言ってるからね。

いや、でもこの場合ってどうなるんだろ？
好意をもってくれたとして考えるべきなのかな？
でもでもただ単にあの時は答えを搾り出した結果、一緒にオタトークしたいって苦し紛れに言っただけかもしれないし。
なんかよくわからなくなってきた。
長谷川も全然表情筋を使って話さないから、感情がよくわからない。
私をストーキングしてたときはすごいコロコロ表情が変わってた気がしたんだけど、あれは演技だったのかなぁ？
ってゆーか・・・私はあいつのどこが好きなんだ！？
いやいや、別に好きじゃないし。

そんなこんなで放課後。

約束通りに待ち合わせをしている東と西の玄関の中間地点に来た。
互いの玄関が違うので、必然的に外での待ち合わせになった。
でもいざ到着して後悔した。
2年間すごしてきて全く知らなかったけど、この場所はカップルたちの待ち合わせ場所になっているらしく、1年も2年も関係なく、カップルたちの片割れみたいな人が待っている。
なんかここにいたら『私彼氏待ってます』みたいなオーラを出しているように見えるんだろうか？
いやいや、そんなオーラ出してないし。
今の私はきっと無表情だし。
ブチャラティのように冷静沈着な顔してるはずだし。

「何ブツブツ言ってるんだ？」
「うおっ！」
「うおっ！って・・・」

突然後ろから話しかけてきた。
長谷川には『背後から忍び寄るスキル』がついているのか？
教室のときといい今といい後ろから声をかけすぎじゃないか？

「びっくりするじゃない。話しかけるなら正面からきてよ」
「仕方ないだろ。西玄関から出たらこっちから来るのは普通だろ。吉野が東側向いてたから後ろから話しかけても不思議ではないと思う」
「た、たしかに」

意外と理論的な思考の持ち主だな。
星の本棚とか入れるんじゃない？

「とりあえずここから離れない？」
「ん？わかった。歩きながら話そう」

そう言って校門へ向かって並んで歩きだした。
なんか変にドキドキしてきた。
チラッと長谷川のほうを見たけど、相変わらずの無表情だった。

「そういえば照井はどうしたんだ？一緒じゃないのか？」
「なんか用事があるから先に帰った」
「そうか」

沈黙。
そういえば長谷川と二人だけで話すのって、ストーカーの時以外で初めてかも。
何話したらいいのか全然わからない。

「そういえば一つ聞きたかったことがあるんだが」
「何？」
「俺がストーキングしていた時、どう思っていたんだ？」
「ウザイと思ってた」

即答。
それ以外に思いつかなかった。

「いや、そうじゃなくて。こいつ変なやつだなーとかってことだ」
「ごめん。ちょっと意味が分からない」

ウザイが答えだとダメなのかな？
すごい的確な答えだと思うんだけど。

「なんて言えばいいのか・・・。たとえば俺は吉野のことが好きな振りをしていた。でも吉野は加藤が好きだった。その状態で告白してきた俺にどんな感情を持っていたのかと思ったんだ。たとえば『少し好きかも』とか『こいつ私を好きになるなんて変な奴』とか」

この間の公園でも思ったけど、説明下手くそだな。
多分頭の中ではわかってるんだけど、人に伝えるのが凄い苦手なんだろう。
でもそんな長谷川は不器用なりに伝えようとしてくれているのが私は嬉しい。
・・・嬉しい？
なんでそんなこと思った？

「で、どう思ってた？」

ひとしきり話した長谷川が相変わらすの無表情で聞いてくる。

私の答えは最初の質問から変わっていない。

「それでもやっぱりウザかった」

待ち合わせ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

テラ少女マンガｗｗ

次回もお楽しみに！ｗｗ

オタトーク

私と長谷川は高校から歩いて２０分ぐらいのところにあるロッテリアに入った。
互いにロッテシェーキを奢るか奢らないかでレジでもめたが、結局私が押し切って奢ってやった。
ちょっとした満足感。
そしてカウンター席についてロッテシェーキを一口飲む。

「なんかありがとな」
「なにが？」
「わざわざこんなとこまで歩かせたし」
「いいよ別に。私も楽しかったし」

歩いてる間はずっとジョジョとかアニメの話をして盛り上がっていた。
好きなガンダムの機体とか好きなスタンドとか好きなシーンとかとか。
とにかく盛り上がって話していたら２０分はあっという間だった。
気がついたら目の前にレジがあった感じ。
長谷川に至ってはお店の前に着いたときにびっくりしたらしく「ボスの仕業か？」ってつぶやいてたし。

「久しぶりにあんなに喋った気がする」
「長谷川ってあんなに喋るんだね。ちょっと意外だった」
「まぁ普段はそんなに話の合う奴がいないからな。話すネタがないんだ」
「あーそれちょっとわかるかも。私も明子以外とは全然話さないもん」

まぁ明子と長谷川以外に信用できる人がいないのもまた事実なんだけどね。
実は正樹のことがあってからちょっと人間不信になってたりする。
あれから明子と長谷川以外の人とうまく話せないでいる。
そんなことを長谷川に知られたくないから隠していくつもりではいる。

「吉野は暗いからな」
「・・・ホント？」
「なんだ。気づいてなかったのか。かなり話しかけにくいオーラを出してるぞ」

全然気付かなかった。
そういえば正樹と初めて話したときも、そんなことを言われた気がする。
でも普通に話しかけられても、話すことがないから別にいいけどね。

「それにしても長谷川ってズバズバ言うよね」
「こーゆー性格だからな。嫌なら治す努力はするぞ」
「努力だけかい」
「努力だけだな。たぶん治らないとは思う」
「ふーん。まぁそれが長谷川らしくていいんじゃない？」
「そう言ってもらえると助かる」

横目でこちらを見ると長谷川がわずかに微笑んだ。
正確には口角をほんの少し上げて目をほんの少し細めただけ。
私は長谷川の無表情とストーカーの時のあの謎の演技の表情しか見たことがなかったので、とても新鮮だった。
というより・・・かなりときめいた。

長谷川ってあんな表情するんだ。
かなりドキドキしてると思う。
今のこの中途半端な気持ちを揺れ動かすのには十分だった。

「どうした？」

今度はちゃんとこちらを向いて聞いてくる。

「な、なんでもない！」
「疲れたんじゃないか？さすがに休み明けにこの距離は遠かったとか？」

なんでそんなに無表情で聞いてくるかなぁ。
逆にすごいよ。

「大丈夫。大丈夫ですから。疲れてないし楽しいから大丈夫」

私は手を前に出して大丈夫ですアピールをした。

「そうか。ならいいんだ。俺も楽しい」

表情こそ無いけど、長谷川がとても楽しそうなのはなんとなくわかる。
話してる時も声が少し弾んでるし、それになによりよくしゃべる。
好きなものに対して熱く喋るのはオタクの特徴だよねー。
多分私という共感してくれる人間がいるから、いつもよりも更にしゃべっている可能性もある。
まぁ全部私の勝手な妄想だけどね。

「今日はありがとう」

「え？何、急に」
「いやホントは来てくれるとは思ってなかったんだ。加藤のことがあったから、男とは話すのも嫌になるくらい男性恐怖症とかになってるかと思って」
だいたいあってるんだけどね。
「でもせっかく出会えたジョジョ仲間だから思い切って誘ってみたんだ」
「長谷川にはたくさん借りがあるしね。断るわけにはいかないよ」
「そうだったのか？これは借りを返すために来てくれていただけだったのか？」
やばっ。なんか変な言い方になっちゃった。
「いや、そういう意味じゃなくて、私が来たいから来んであって、別にやましい気持ちは」
「やましい気持ち？」
「あ、いや、違う！もーなんて言えばいいの！」
「逆ギレはやめてくれ」
「別に怒ってないわよ！なんだかんだで長谷川にはお世話になったから、長谷川に恩返しがしたいの」
自分でも何がいいたいのかわからなくなってきた。
このままだとあることないこと言ってしまいそうだ。
「わかった。無理に言おうとしなくていい。実は今日誘ったのは、吉野が奢らせろってクラスまで来たときに様子が変だったから、こんな話をして忘れてもらおうと思ったからなんだ」
「え？」

「吉野は自分では気づいていないかもしれないが、とても危なっかしい人間だと俺は思う」
「どういうこと？」
「加藤の時だってホントに死にそうな顔をしてたし、今日だってクラスに来たときにクラスの女子に話しかけられて固まっていただろう？」

やっぱり気づいてたんだ。
長谷川は私のことを見すぎだと思う。
そんなんじゃ好きって勘違いしてもおかしくないよ。
もうかなり好きってほうに傾いちゃったじゃないかコノヤロー。

「放っておいて前みたいに休まれても困るし、ましてや自殺とか考えられても困る」
「さすがにそこまでは・・・」
「だから自分では気づいていないって言っただろ。そういう意味で吉野は危なっかしい人間なんだよ」

ホントによく見てるな。
観察能力に優れすぎでしょ。
ジョルノかよ。

オタトーク（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

次回、新キャラ登場します。

ということで次回もお楽しみに！

ケータイ

「何読んでるの？」
「ん？新しいケータイのカタログ」

暦は7月の下旬。
今日、終業式が終わって、明日から夏休みだ。
長谷川といろいろ話したあの日から一ヶ月が経った。
あの日以降、特に何も進展がないまま一ヶ月が経った。
長谷川に対する気持ちに気づいてから一ヶ月が経った。
・・・ホントに何もなかったなぁ。
そんなことを考えながら私は、家の居間で新しいケータイを買おうとカタログをペラペラとめくっていた。
学校帰りに近くの電気屋さんでもらってきた。
隣で夜ごはんがもうすぐできると聞いて二階から降りてきた一美がテレビを見ている。
ケータイを壊してからケータイの無い生活を続けていたけど、夏休みに入ってから明子と連絡が取れないのはちょっと寂しかったので買うことに決めた。

「それにしてもどれがいいのやら・・・」

まずケータイ会社だけでも3社。
さらにその中でも似たようなケータイがたくさん。
そしてさらにスマートフォンがたくさん。
もうわけがわからないよ。
一美は上にカシャンって出るタイプのスライド式ケータイを使っている。

「ねぇ一美。どれがいいと思う？」
「それくらい自分で決めなよ。困ったら見た目で決めちゃえば？」
「見た目ねぇ・・・」

どうせどれを選んだって結局は『慣れ』だしねぇ。
よし。決めた。明日見に行ってこよう。

「一美。明子に『明日暇だったらケータイ見にいかない？』メールして」
「いいけど・・・明日必ず決めてきてよね」
「なんで？」
「夏休み中ずっと私が明子さんとお姉ちゃんの中継するなんて嫌だもん」
「えー別にいいじゃーん」
「なにそれ。なんかお姉ちゃんキャラ変わったよね」
「え？そんなことないよ？」
「・・・そんなことあるから言ってんじゃん」

私は別に変わったつもりなんてないんだけど、明子にも同じことを言われた。
やっぱり恋をすると人って変わるんだろうか？
まぁいいや。

「あ、返事きた。プッ！断られてるし！『ごめん、明日は無理だわ』だってさ」
「ナンテコッタイ。仕方がないけど一人で行ってくるかな。一美も来る？」
「行かない」
「冷たいなぁ。ツンデレかよ」
「デレはしばらく来ないけどな」

「ごはんできたわよー」
「「はーい」」

そして次の日。
一人で街中まで出てきた。
すこぶる暑いのでなるべく外には出ないようにしつつ電気屋を目指す。
最近の札幌駅周辺は地下道が発展しすぎていて、外を出なくても大通公園の少し向こう側まで行ける。
一人で街中に出てきたのって久しぶりかも。
高校に上がる前はよく一人で来てたけど、明子と友達になってからは二人で来るのが当たり前だった。

「えーと電気屋さんは・・・」

いろんなところに貼られている案内板を頼りに電気屋までたどり着いた。
そして目の前に広がるケータイコーナー。
うん。まったくわからん。
これどれがいいんだろ。
店員さんと話すのが苦手なので、近づいてきた気配を感じ取りながら、逃げるようにいろんなケータイを見ていく。
でもこれといってピンとくるものがない。
スマートフォンも見てみたけど、私にはまだ早いと思う。使いこなせる自信がない。

「うーん・・・」

立ち止まっていると店員さんが近寄ってきた気配を感じたので、また足を動かして移動する。
店員さんが居なくなれば早く決まる気がする。
店員よ。いなくなれー。
そんな願いは通じず、また気配を感じて逃げ回る。
そしてついにはめんどくさくなってきた。
１０分ぐらい歩き回ったのにピンとくるものがなかったせいか、どのケータイでもよくなってきた。
近くにあった赤いケータイに決めた。
赤は3倍早いからな。

「あのすみません」
「はい」
「これください」
「かしこまりました。少々お待ちください」

「ありがとうございましたー」

無事購入。
帰っていろいろと設定しよっと。
時計を見ると時刻は午後1時。
ちょっとお腹空いたなぁ。
そう思っていると、目の前のエスカレーターから見知った顔の人が降りてきた。

「あ。長谷川だ」

どうやらこちらの存在には気づいていない様子。
こちらキミーコ。
いつも背後に急に現れて驚かされるから、逆に驚かせたいと思う。
よし。作戦開始。
頭の中で一人会議を行い、長谷川の真後ろまで来た。
長谷川の驚く顔を想像して少しニヤける。

「長谷川！」

少し大きめの声で名前を呼んだ。
期待を見事に裏切って、特に驚いた様子もなく振り向く。

「えーと・・・どちら様ですか？」

・・・あれ？
もしかして人違い？
でも長谷川にしか見えない・・・

「え？あれ？」

でもたしかにいつもの無表情な長谷川と違って表情がある。
それに微妙に目の大きさとかも違う気がする。

「あのー・・・あ。もしかして吉野ちゃん？」

吉野・・・ちゃん？
見た目がほぼ長谷川な人にちゃんづけで呼ばれるとなんかムズムズする。
しかもめっちゃ笑顔。

「あ、はい・・・」
「やっぱりそうか！いやーホントに可愛いねー。なんか守ってあげたくなる感じわかるわー！」
「???」
「兄さん。吉野が困ってるじゃないか」

ふいに後ろから声がしたので振り向くと、もう一人の長谷川が立っていた。

「えっ?えっ?」

困惑した私は前の笑顔の長谷川と後ろの無表情の長谷川を交互に見る。

「は、長谷川が二人・・・?」
「吉野。落ち着け」
「そうそう。吉野ちゃんは少し落ち着こうか」

なんだこれ。

「吉野。こいつは俺の双子の兄の長谷川鳴海(はせがわ なるみ)だ」

ケータイ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

次回もお楽しみに！

ストックホルム症候群

私と長谷川兄弟は近くのオムライス屋にに入った。
話を聞くと、あそこの電気屋さんの上のほうの階に、あの有名なモンスター育成ゲームのショップがあるらしい。
そこに二人で買い物に来ていたとのこと。
鳴海さんのほうが好きらしく、長谷川はただの付き添いだそうだ。
ちなみに呼び方は長谷川は長谷川。お兄さんのほうは鳴海さんで定着した。

「えーと、なんて呼べばいいですか？」
「じゃあグリーンで」
「え？なんでライバル？」
「おぉ！ホントに引き出しすごいね！ここまで知ってるとは。じゃあ鳴海さんでお願いします」
「わかりました。鳴海さんですね」
「それと一応同い年だから敬語は無しね」
「あ、ホント？ちょっと辛かったんだよねー。同い年に敬語とか」
「あれ？結構順応早い？」
「兄さん。そこは突っ込まないと」
「え？どういうこと？」

オムライス屋に向かう時にそんなやりとりがあった。
その時にひとつ分かったのが、鳴海さんは私や長谷川ほど引き出しが多くないらしい。
主にゲームが大好きで、一番がＤＳのモンスター育成ゲームというわけらしい。
ってゆーかあの一連の流れで気づいた長谷川はすごいな。さすが私の見込んだ男だ。

そして各自オムライスを注文し今に至る。

「ところで吉野ちゃんは何してたの？」

４人がけの席の向かいに長谷川兄弟が座っている。
顔はほぼ同じ作りだけど、表情が全然違うから見分けられないことはない。
左が兄、右が弟。

「ケータイが壊れてたから新しいのを買ったの」
「へー。どんなやつ？」
「さぁ？なんか赤いやつ」
「え？どういうこと？」

よく頭に『？』マークを浮かべる人だ。
今日だけでこのセリフ２回目だ。
私は隣に置いていた紙袋からケータイを取り出す。
鳴海さんに箱ごとわたした。

「なんかどれがいいのかわからなかったから適当に近くにあったやつにしたんだ」
「すごい選び方だね・・・。隆夫。吉野ちゃんってこんな感じなの？」
「いや、これは俺にもよくわからん。でもいろいろと適当なところもあるな」

地味に『適当』ってひどいな。
見てもわからなかったのか、箱を私に返してくる。

「へー。吉野ちゃんってＢ型？」

「A型」
「えー！意外だわ！」
「エー型だけにですね。ナイスリアクション！」
「さすが兄さん！」
「そんなつもりなかったわ！」

親指を立ててグットサインを出した私たちを鳴海さんがつっこむ。
鳴海さんはよくしゃべる人だ。
多分生まれるときに、長谷川の分も鳴海さんが持っていってしまったのではないかというほどによくしゃべる。
そのかわり長谷川はボケに専念（？）していた。
私からしてみれば、長谷川は私のピンポイントのボケによく気づくやつだと思う。
さすが私の元ストーカーだ。
そう考えるとストーカーに恋をしている私って、あのストックホルム症候群ってやつなんじゃないか？
いやいや。そんなことないさ。

「でもなんで血液型？」
「特に意味はないよ。なんとなく聞いてみただけ。でもA型には驚いた」
「俺も兄さんのリアクションに驚いた」
「だまらっしゃい」
「私、よくB型と間違われるんだけど」
「でもわかるもん。B型っぽいもん」
「そんなにかなぁ？」
「自分のことは意外と気づかないもんだよ。ね、隆夫？」
「何が？」
「こっちの話ー」

首を傾げる長谷川に笑顔の鳴海さん。
ここでオムライス登場。
私のはホワイトソースとデミグラスソースの二色のソースがかかったオムライス。
鳴海さんのはデミグラスソースたっぷりのオムライス。
そして長谷川のは・・・なんだこれ？天津飯？

「長谷川・・・天津飯頼んだの？」
「！？」
「ちょっ！吉野ちゃん！ゲホゲホ」

驚いてこちらを見る長谷川と、一口目を食べた時に変なところに入ったのか、猛烈に咳き込む鳴海さん。
だって長谷川が頼んだのってどう見ても天津飯だもん。
あんかけっぽいやつの上に、若干半熟気味の卵がかかったオムライスってどう見ても天津飯じゃん。

「この揚げなすとあんかけオムライスは美味しいんだぞ」
「天津飯じゃなかったんだ」
「一見ミスマッチと思うけどいざ食べてみるとあんかけが和風で天津飯にかかっているあれとは全然違うしこの揚げなすがうまい」

無表情＋一息で言い切ると、オムライスを口へと運び、パクリと一口。
モグモグと咀嚼しながら頷き、ゴクリと飲み込む。
そして言う。

「目覚めよ。バッカス」
「食べる前に言えよ」

長いボケでもちゃんと突っ込むのを忘れない。
さすが私。うん。ツッコミの才能あるのかもしれないな。マンガとアニメとゲームネタに限るけど。

「ゲホゲホゲホゲホゲホ」

鳴海さんはまだむせていた。
長谷川が背中をさすった。

ストックホルム症候群（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回は小ネタが多いです。
全部わかるかな？

次回もお楽しみに！

ＵＦＯキャッチャー

どう考えてもおかしい。
今日の長谷川はテンションが高すぎる。
何か良いことがあったのだろうか？
いつもの長谷川からは想像できないほど楽しそうだ。

「長谷川？なんか良いことあったの？」
「ん？別にいつもと同じだが？」
「いやいや、全然違うでしょ」

いくら無表情だからといってもテンションが高いのは声質でわかるってもんだ。

オムライスを食べた私たちはゲーセンに来ていた。
明子曰く「あそこは私たちのお金を巻き上げて楽しんでいるところなんだ！」とのこと。
欲しかったフィギュアが（おそらく）定価の倍近くの値段をかけてもＵＦＯキャッチャーで取れなかった時に言っていたから、きっと相当悔しかったんだと思う。
私はあんまりフィギュア＜漫画なのでＵＦＯキャッチャーの中に好きな作品のやつがあれば３００円ぐらいやる程度だ。
そして鳴海さんが現在ＵＦＯキャッチャーで例のゲームのでかいぬいぐるみのゲットに励んでいる。

「くそっ！俺にもキャプチャが使えれば！」

あのグルグルするやつか。

ＵＦＯキャチャーの前でなんか騒いでいる鳴海さんを、少し離れたところから見ている私と長谷川。
なぜかいつの間にかここまで離れてしまった。
鳴海さんには悪いけど、あれだけ騒いでいる人とは他人と思われたい。
また失敗したみたいだ。
隣の長谷川を見る。
直前までのテンションを感じさせないような無表情だった。
私の視線に気づいたのかこちらを向いた長谷川と目が合う。
そのまま目を見る。

「何か用か？」
「長谷川ってゲーセン好きなの？」

テンションが高いのはきっとゲーセンが好きなんだと思った。
ここに来てからすごい落ち着きがなくなったもん。
今だって手に財布持ってるし。

「たしかに好きだが・・・なんでわかった？」
「そりゃ長谷川を見てたら誰でも気づくよ。なんか好きなのやってきたら？」
「でも兄さんを見ておかないと」
「あんたは保護者か。なら鳴海さんは私が見ておくから。これでいいでしょ？」
「吉野・・・お前いいやつだな！行ってくる！」

今頃かよ。

信じられないスピードで去っていく長谷川。
なんか長谷川って見た目によらず子どもっぽいよなぁ。

あれで愛嬌があれば完璧モテるんだろうなぁ。
でもあの性格を知っているのは私だけって思うとなんか嬉しかった。

「あれ？隆夫は？」
「なんか好きなやつしに行ったよ」
「えー！せっかく俺が離れてたのに！」
「鳴海さんめちゃくちゃ集中してたじゃん」
「まぁね。あのぬいぐるみは手ごわかった」

かいていない汗を拭う仕草をする鳴海さん。
しかし手には何も持っていない。

「もしかして取れなかったんですか？」
「ギクリ。ま、まぁ相手のほうが一枚上手だったってことで」
「なんなら私取ろうか？」
「得意なの？」
「まぁね」

よく明子にも頼られてる。
さっきまで鳴海さんがやっていた機械の前に立つ。
鳴海さんから仕事料の３００円を受け取り、一枚だけ投入。

「えーっと・・・こんなもんかな？・・・よっと・・・」

後ろから鳴海さんの熱い視線を受けながら、慎重にアームを動かしていく。
ＵＦＯキャッチャーにはいくつかポイントがある。
まずはアームの開き具合。
これを把握するのとしないのとではかなり差が出てくる。
そしてボタン。

ＵＦＯキャッチャーには横に動くボタンと奥に動くボタンが付いているが、時々？の下に降りている途中で止めることができるボタンがある機械もある。
私はあれがあるやつが得意だ。
最後に方法。
最近のＵＦＯキャッチャーはただ景品を掴んで持ち上げるだけではなくて、一本の棒に引っかかっている景品のフックを外す形式のものも増えてきている。
後者のは明らかに１００円だけだと取りずらいし、『ぬいぐるみの紐がひっかかったー！』というようなラッキーが通用しないので、根気とお金とミスをしない精神が重要なものだ。
今回の鳴海さんがえんやこらしていたのはまさに後者の形式だった。
でもここまで落ちそうなら多分２００円ぐらいで落ちると踏んでいた。
一回目でもうかろうじてひっかかっているところまでずらせたのでトドメを刺すために２００円目を投入。

「おぉ・・・すげぇ・・・」

鳴海さんの声が聞こえる。
私はボタンを慎重に操作する。
ウィーン。ガタンッ！
ゲットだぜ！
意外とあっさり取れてしまったためか鳴海さんは驚いている。
店員さんに袋をもらってその中に入れる。
実際に持つとやっぱり重いな。

「はいどーぞ」

鳴海さんの前まで行き袋を渡す。

「ありがとう・・・ホントにありがとう!!」
「ちょっとキモイです!」

長谷川と鳴海さんの違いはこの気持ち悪さにあった。
鳴海さんは感情を制御できない人だった。

「いやー!超嬉しいわ!ありがとう!」
「どういたしまして。そういえば長谷川遅いね」
「隆夫ならたぶん・・・ほらいた」

すこしキョロキョロして探したらすぐに見つかった。
これが双子特有の『互いの居場所がわかる』ってやつなのか?
二人で長谷川のもとに向かうと、謎のギャラリーが出来ていた。

UFOキャッチャー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いちゃってもいいですよ？

かなりラブコメ要素が強くなってきました。
この二人（今は三人ですが）はどうなるのでしょうか？
実は今作もキャラクターたちがあいかわらず大暴走しております。
一番困っているのは僕ですが、みなさんは笑いながら見てやってください。

では次回もお楽しみに！

謎のギャラリー

私と鳴海さんが長谷川のもとに向かったとき、長谷川の周りにはギャラリーができていた。
ギャラリーと言っても１０人にも満たない人数ではあるが、ギャラリーはギャラリーだ。
ゲーセンでギャラリーができると言えば、あの踊りながら足でボタンを押していくゲームとか有名な格ゲーの人が来ていてその人見たさに腕を組んだ人たちが集まっているとかはよく聞く話だ。
でも長谷川がやっているのはこの距離から見てもわかるようにＵＦＯキャッチャー。
ギャラリーができるほどのＵＦＯキャッチャーってなんだ？
その答えは長谷川の足元にあった。

「何あれ？」
「隆夫はＵＦＯキャッチャーが凄い得意なんだよねー」

のんきに鳴海さんは言っているが、あの量は半端ない。
機械の前に立って真剣にプレイしている長谷川の足元には大量の袋があった。
１，２，３，４・・・５袋。
ここから見た感じだと５袋は見える。
私が鳴海さんの景品を１つ取っている間のわずか２０分ぐらいの時間で５袋分も取ったの！？
きっとギャラリーというよりも野次馬ってほうが正しいのかな？
みんな袋を見てるし。

「おー隆夫。相変わらず大量だな」
「あ、兄さん。ちょっと待ってて」

そう言うとプレイに集中し始めた。
今はさっき私がやってたタイプのＵＦＯキャッチャーで、景品はジョジョのスタンドのフィギュアだった。
しかも私の時よりはまだ取れそうにない。
長谷川は２００円を一気に入れると、ポチポチを操作し始めた。
一回目は失敗したが、二回目であっさりとってしまった。
私の時とは違って『ずらしていく』のではなく『持ち上げてずらす』という感じだった。
正直なところ、どうやったのか全然わからなかったけど、ありのまま起こったことを言うぜ！
２００円入れてなんか操作し始めたと思ったら、景品が自分から落ちていくようにずれていって落ちたんだ！！
って感想だ。

「やっぱり隆夫はすごいな！」

兄、感嘆。

「今のどうやったの？」

思わず質問する私。

「アームの力と景品の重さを計算して、そこからどこを狙えば一番効率よく落とせるかを導き出したらあとはボタンを正確に押していくだけだろ。そんなにすごいことか？」
「・・・あんたは天才か！？」

簡単そうに言っているが、常識的に考えてそんな計算してる時点で『俺頭イイー』発言だし、正確にボタン押すだけって簡単に言うけ

ど、それが難しいからみんな景品が取りにくいんだろ！
と心の中でつっこむ。

「まぁ成績は悪くないぞ。毎回１０位以内には入る」
「長谷川ってそんなに頭良かったの！？」

意外だ。
うちの高校は順位が廊下に貼り出されるようなことはないので、テスト後に受け取る細長い全教科の成績が書かれた紙でしか順位とかがわからない。
私は明子と比べるとかなり上位にいるし、前回の定期テストでも総合で１５位に入って明子に自慢していた。

「じゃあ前回の定期は何位だった？」
「あぁ。あれは１位だった」
「１位！？」

あれ？なんか１５位で自慢していた自分が恥ずかしくなってきた。
１位で自慢しないとかどんだけ強靭な心を持ってるんだ。

「まぁテストは自分の実力を調べるためのものだからな」
「そ、そうなんですか。今度からは長谷川先生と呼ばせていただきます」
「工場長と呼んでいただきたい」
「生産性の問題か？」

この頭の良さでこのオタク度って反則だよ。
天は才能を与える人材を間違えたらしい。

「隆夫。そろそろ満足した？」

くだらないやりとりをしていると鳴海さんが長谷川に声をかけた。
どうやらＵＦＯキャッチャーをしだすと、声をかけられるまではなかなか自分から帰らないらしい。
なんとも変な性格。もし今度ゲーセンに一緒に来ることがあったら気をつけよう。
それ以前に一緒に来るような関係にならなきゃいけないのか。

「そうだな。そろそろ帰るか」
「私も帰ってケータイの設定とかいろいろしたいし」
「じゃあ帰ったらメールしてやれよ。隆夫」
「いや、アドレスとか知らないし」
「なんと！？」
「そんなに意外か？」
「だってお前。このご時世で友達と言えば最初にするのがアドレスの交換って常識だろ！？」
「どこの世界の常識だ」
「いやいや！隆夫の常識がズレてんじゃないのか？そんなんだから友達ができないんだよ」
「別にそこまでして友達が欲しいわけでもないからな」

長谷川ってやっぱり友達居ないんだ。
まぁ少なくてもいるとは思っていなかった。

「この機会に教えてもらえば？」
「でも吉野はまだケータイ買ったばっかりだぞ？」
「そんなもん紙に書いて渡してやればいいんだよ。ほれ」

鳴海さんはそう言って手帳を差し出して、アドレスを長谷川に書かせる。

カキカキ。
書かせた手帳のページを破って私に渡す。いや、押し付けるように渡す。

「なんて強引な・・・」
「吉野ちゃんも吉野ちゃんだ。少しは行動しなさいな！とりあえず帰って設定終わったらメールしてね！」

じゃ！と言って歩き出す鳴海さん。

「なんか悪いな。兄さんは少し強引だから。気がむいたら送ってくれ」
「別に気にしてないよ。とりあえず設定が終わったら送るよ」

そうかと言って鳴海さんを追いかける長谷川。
顔は似てるのに中身は全然違うなぁ。
そんなことを思いながら、思わず手に入れてしまった意中の相手のアドレスが書かれた紙を見た。

謎のギャラリー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

訪問者

翌日。
自分の部屋で長谷川からもらったアドレスが書かれた紙を見ていた。
一応登録はしてみたものの、メールを送っていいものか少し迷っている。
用も無いのに送るのはいかがなものか？
長谷川は私のアドレスを知らないのに、こちらは知っている。
これは何もなくても送るべきなのか？
私がうむむと部屋の中で唸っていると、
部屋のドアをノックする音が聞こえて一美が入ってきた。

「お姉ちゃん。ちょっといい？」
「ん？どうかした？」

あのツンデレな妹の一美が自ら私の部屋に入ってくるなんて珍しい。
前に私が布団生活をしていたときに来たのだって、かなりレア度が高いことだった。

「あのね、実はご相談がありまして・・・」
「相談？」

これはますますレア度が高いルートに迷い込んでしまったみたいだ。
どっかでフラグ立てたっけ？

「うん。実は今・・・あ、誰にも言わないでよ？もちろん明子さんにも言ったらダメだからね？それで今、その、私、恋をしているわけですよ」

一美が恋かぁ。

「へー。別にいいんじゃない？」

「ちょっと、まだ続きがあるんだってば。でね、その相手の人なんだけど、私より年上ってゆーか、お姉ちゃんと同じの歳の人なんだけどね。あ、年上ってどう思う？・・・まぁ年齢なんてあんまり気にしないよね。で、今年受験じゃん？聞いたところによると、なんか東京の大学に行くらしいんだよね」

わざわざ東京の大学に行くってかなり頭いい人だよな。

一瞬長谷川のことが頭に浮かんだ。

・・・まさか長谷川のことじゃないよね。

「で、そこでお姉ちゃんに相談なんだけど、私はどうしたらいいと思う？」

「どうしたらって・・・どうしたいの？」

「私はまだ中学生だから相手にされないってのはわかってるんだけど、それでも好きなもんは好きだし、とりあえずは気持ちを伝えるだけ伝えておきたいなぁって思ってる」

「・・・なんの相談なの？」

「いや、ちょっと聞いてもらいたくて・・・」

なんでそこまで答えが出ているのに相談しにきたのかまったくもってわからない。

多分後押しして欲しかったんだろう。

顔まで真っ赤にしちゃって・・・可愛い妹である。

「もう自分の中で答えが出てるんだからそれでいいんじゃない？」

「でも失敗したら・・・」

「大丈夫だって。まだ若いんだし、失敗したって相手からどっかに

行っちゃうんだから大丈夫」
「・・・なにげに失敗すること前提じゃない？」
「成功するときのこと考えたって、どうせ嬉しくて頭真っ白になるんだからあんまり意味ないって」
「お姉ちゃんが変なこと言ってる。でも正論っぽくて気持ち悪い」
ちょっと正論言ったらこれだよ。

「でもなんかちょっと勇気でたよ。その、あ、ありがとね」
「・・・ついにデレたな」
「別にちょっと感謝しただけじゃん！もういいよ！じゃあね！」

バタン！とドアを閉めて一美が出ていった。
久しぶりに一美のデレたところを見た気がする。
ってゆーか最初に部屋に入ってきた時点からデレデレだったのは内緒にしておいてやろう。
それにしても受験かぁ。あんまり夢とかないからなぁ。
とりあえず近くの大学に行ってから考えようかなと思ってる。
そういえば長谷川ってどこの大学行くんだろ？
かなり頭が良いからそれなりに高いところ行くんだろう。
ちょっと気になってきた。

「そっか。これ送ってみればいいんだ」
私はケータイを手にとってメールを打ち始めた。
ポチポチ。

『こんにちわ。吉野です。アドレス登録したから送ってみました。
ところでどこの大学行くの？』

何回か文章を作り直して固すぎず柔かすぎない絶妙の文章ができた。
最初だから絵文字・顔文字・『ｗｗｗ』は無し。
よし。送信。
何気に緊張する。
一応好きな人にメールを送っているわけだから、返信が帰ってこなかったらどうしようとか考えてしまう。
そして数分後。
長谷川から返信が返ってきた。

『長谷川だお。大学とかまだ決めてないｗｗとりあえず自分で行ける中で一番高いところにでも行ってみようかと思ってる（、・∀・′）ｖ　吉野はどこに行くんだ？』

かなりオタク丸出しな文章だった。
長谷川相手に文章を考えていた私が馬鹿だった。

訪問者（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

今回は妹デレ回でした。
なんとなくデレさせたかっただけです。
後悔はしていない！

ということで次回もお楽しみに！

メール

『オタク丸出しじゃんｗｗ私もまだ決めてないｗｗ大学ってどうやって選んだらいいの？』

もう何も気にしないで勢いだけで返信。

メールが返ってくる。

以下メールのやりとり。

『オタクだからなｗｗそれは俺も聞きたいところだ。とりあえず入って勉強とかについて行けないようなところは入らないほうがいいとは思う』

『やっぱりそーゆーもんなのかな？』

『大学は勉強ばっかりしてるやつは負け組だって鋼の腕と足をもつ身内が言ってた』

『普通に兄さんって言えｗｗまぁなんかサークルとか色々あるみたいだしね』

『俺はあのリア充な集団に入れるとは思えないけどなｗｗ』

『はげどｗｗ』

そのあと何件か意味の無い内容のメールを繰り返して終了した。

それにしてもまさかいきなり『ｗｗｗ』を使ってくるとは思わなかった。

なんか某掲示板とかも見てそうで怖いな。

今頃スレ立てされてたりして。・・・ないな。

ブブブブブブブブブ。

机の上のケータイのバイブ機能がブブブブと音を立てた。

メールを見ると明子からだった。

アドレスの登録完了しましたメールだった。

明子はどこに行くんだろ？
思い立ったが吉日。

『明子はどこの大学に行くんでゲスか？ｗｗ』
『私は保育士の専門学校だわよー（・∀・）』

なんでも、ほとんど書類選考だけで合否がわかるから選んだらしい。
しかも結果が１１月までにはわかるらしい。
ようは試験勉強が嫌なのね。
明子らしいや。
でも明子はもともと小さい子が大好きだからむいてると思う。

『私は小さい子を内緒でオタクの英才教育してやるのだｗｗ』

この内容のメールがあったけど、さすがにこれは冗談だと思う。いや、冗談だと思いたい。
そんなことをしたら日本終わるぞ？
とりあえず今日得た情報をまとめよう。
長谷川がランクが高い大学。
明子が専門学校。
さて私はどうしようか？
ホントなら長谷川と同じ大学に行きたい。正直一緒にいたいしね。
でも私が行ったところで勉強についていけるとは思えない。
だからと言って明子みたいに専門学校に入るくらいの目標があるわけではない。
うむむむ・・・
よし。とりあえずは残りの課題でもやるかな。
私は机に夏休みの課題を広げて取り掛かった。
実はもうほとんど終わっていて、このプリントともう2枚ぐらいで終わりだった。

夏休み前の学校の授業中でほとんど終わらせておいて、夏休みは遊ぼう作戦だった。
でもよく考えたら私って明子以外に遊ぶような友達いないから、この作戦は初めから失敗することが決まっていたのだ。
私としたことがぬかった！
でもどうしてこんな時期に課題なんてあるのだろうか？
普通に受験勉強させてくれたらいいのに。
まぁ勉強しないで遊んでる人もいるだろうけど、その人は受験で失敗してしまえばいいと思う。
そう考え始めたら勉強するのめんどくさくなってきた。
本でも読むか。
本と言っても、本棚には漫画とラノベしか並んでない。
私はラノベを読みたい気分だったので、どれにしようかと本棚の前に座って吟味・・・
あれ？このシリーズの3巻の下巻がない。
おかしいなぁ・・・たしか内容は覚えてるから読んだはずなんだけど・・・
棚のほかのところを探しても見当たらない。
そこでふと思い出した。
そういえばこのシリーズってアニメ化したはずだから、それで見たけど本は買ってないのかも。多分そうだ。

「どうしようかなー」

どうせ暇だし買いに行くか。
思い立ったが吉日。善は急げ。
私は着替えて出かける準備をした。
と言っても近くの本屋に行くだけだからかなり適当なコーディネートだ。
外に出て愛車の『エクストリームサイクロン号』（名付け親は私）

にまたがってペダルを踏む。
『エクストリームサイクロン号』、通称『ムサイ号』（こっちの名付け親は明子）こと自転車は私の力で動いていく。
本屋に着いて中に入ると、クーラーが聞いていてとても涼しかった。
うちの家にもクーラーが欲しい。
我が家は扇風機だけで生活している。
北海道民の大半がそうなのだが、夏場はクーラーではなく扇風機だけで過ごしている。
クーラーを持っている家庭は割とリッチな家と認定されることもしばしば。
まっすぐにラノベコーナーに向かう。
そして目的のシリーズの前に立って抜けていた巻を手に取る。
ふと話し声が聞こえて隣の本棚を覗いてみた。
もちろん他のお客さんもいるわけだから話し声がしてもおかしくはないんだけど、私はなんとなく覗いてみたくなってこっそり覗いた。
そこには仲良さげに話している明子と長谷川がいた。

メール（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけるとトランザムできるかもしれません。

そろそろ話を動かしていきまする。

次回もお楽しみに！

見てはいけないもの

私は驚きのあまり、そのまま何事もなかったかのようにレジで会計を済ませ、普通に家に帰って一息ついた。
頭の中はぐちゃぐちゃだったけど、からだはとても冷静だった。
あれ？なんか見てはいけないようなものを見た気がするぞ？
よし。冷静になって思い出してみよう。
まず本を買いに本屋に行った。
そこで欲しかった本を見つけて買った。
家に帰った。
終わり。

「あれ？終わっちゃった！？」

いやいやいやいや違う違う！！
えーとなんだっけ・・・いや、思い出せるんだけど思い出したくないような感じ。
えーと・・・思い出したくないなぁ・・・
たしか本棚の影からそっと覗いたらたしか・・・

「あああああーーーーーーーー！！！！えっ！？なんで！？なんでなのっ！？あの二人ってデキてたの？私だけ知らなかったとか？うわーなんか仲間外れにされてるしー・・・はぁ」

はぁ。
もしもホントに付き合ってたんだとしたらどうしよ。
でも明子には、私が長谷川に気があることはバレてるっぽいし、長谷川は長谷川で・・・
ん？私、長谷川のこと全然知らないな。

知ってることと言えば、ジョジョ好き・ゲーセンのプロ・成績優秀。
このぐらいだ。
なんで好きになったんだべ？

「って話が脱線してる！」

そうだ！今は私の長谷川に対する気持ちじゃない。
問題なのは明子と長谷川の関係についてだ。
長谷川の家からはあの本屋が一番近いから、あそこにいるのはわかるよ。
でも明子は？
明子の家ってあの本屋の最寄駅からＪＲの駅で４駅ぐらい離れてるんだよ？
わざわざこっちまで来る用事ってなんだ？
まさか本当にあの二人が付き合っているとしたら、全部つじつまがあう。
長谷川に会いにきた明子。
これから二人で夏休みの宿題を片付けるために長谷川の家で・・・

『照井。そんなこともわからないのか？』
『ちがうよ！長谷川くんの教え方がわかりにくいんだよ！』
『そんなことはない。俺は教科書よりはわかりやすく教えていると思っている』
『これだから天才肌はいかんのだよ』
『俺は天才なんかではない。普通に授業を受けていれば簡単に解けるはずだ』
『いいや違うね』
『そうだそうだ！隆夫は天才バカだ！』
『兄さんまで・・・』

『さすが鳴海さん！私の良き理解者！』
『フフフ。この長谷川鳴海の永遠の理解者としてそばにいさせてもよいぞ？』
『それはいくら兄さんでもだめだ！照井はおれの理解者なんだ！』
『二人とも私のために争わないでー！』

ってな感じになってたらどうしよう！
・・・これはないな。
でもなんで明子があの本屋にいたのかが謎だ。
誰か私に答えを教えてくれー！
その時ケータイからオラオラオラオラオラー！と声がした。

「ん？電話？」

私の着信音はオラオラの連打である。
ケータイを手に取り電話にでる。

「もしもし？」
『あ。もしもし？』
「どちら様ですか？」
『あ、オレオレ！オレだよオレ！あの高校の時からの同級生の！』
「なんだ明子か」

まるっきり女声で『オレオレ！』って言われてもバレバレじゃん。
とても落ち着いていたけど、心臓はバクバクである。
なんせ噂の明子さんからの電話である。

「どうかしたの？」
『実は今長谷川くんといるんだけど、良かったら君子も来る？』

「え！？なんで！？」
『いやぁ、たまたま会っちゃってさぁ』
ホントにたまたまなのか？
「どこの本屋？」
『君子の家の近くの本屋』
「何しに行ってたのよ」
『君子の家に行こうかと思ってたら、君子の妹ちゃんに勉強教えて
って言われちゃってさ。そんで本屋によってから行こうと思ってて、
よったらよったで今度は長谷川くんに会っちゃってさ。で、君子の
家だと妹ちゃんがアレだからこっちに来たほうが長谷川くんと話し
やすいんじゃないかぁと思って』
「一美・・・あいつが原因か！」
『へ？原因？なんの話？』
「なんでもない！こっちの話！今から行く！マッハで行く！」
電話を切った私は一美の部屋にオラオラノック（高速連打ノックの
こと）をする。
コンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコン！！！
「ちょっと何！うるさいうるさい！わかったからちょっと待ってて
！」
「いいや限界だ！開けるね！」
がちゃり！
開けてから気づいたけど、久しぶりに一美の部屋を見た気がする。
そこにはなんかこう・・・見てはいけないようなものがあった。
「なんで吉良よしk・・・きゃーっ！！！ホントに開けないでよ！

！」
「一美・・・あんた・・・」
「ちょっともう出てって！むしろこの家から出てって！」
「え？ホントここって一美の部屋・・・？」
「もうお姉ちゃんには関係ないでしょ！私の趣味をとやかく言わないでよ！出てって！」

強引に追い出されてしまった。
えーと。とりあえず明子の待つ本屋に行こう。
愛車のエクストリームサイクロン号にまたがり、半分くらいボーッとしたままペダルを踏みこむ。
ゆっくりと動き出す愛車に力をいれながら一美の部屋を思い出していた。
一美の部屋にあったもの。
それは部屋の中にある大きなコルクボードいっぱいに貼られていた、たくさんの明子の写真だった。

見てはいけないもの（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

ついに話が動き始めましたね！一美の！

次回もお楽しみに！

エクストリームサイクロン号

一日に本屋さんを自転車で2往復していることに気づいた私。
これも全て姉である私になにも話さない妹が悪いと思う。
でもあの部屋を見た直後にこのセリフを本人の前で言えるかと言えば、答えは否だ。
それにしてもいつの間に・・・いや、いつからあんなことに・・・。
これはいわゆる『百合』というやつだろうか？
漫画や二次元の世界では馴染み深い言葉だけど、三次元であるこの世界ではあまり見かけない言葉だ。
花の名前は別だけどね。
そしてなんでまた明子に。
これは問い詰めるべきなのか？それとも姉として応援してあげるべきなのか？
うむむむ。
唸りながらムサイ号を漕いでいると本屋の入口が見えてきた。
入口横にある駐輪所に愛車を止めた私は、店内に入り明子と長谷川を探す。

「あれ？いないぞ？」

店内は一階が書店、二階がレンタルコーナーとなっている。
きっと二階の方にいるのだろう。
そう思って二階に続く階段を登る。
登りきる直前で声が聞こえてきた。

「やっぱりこのシリーズのほうが面白いって！」
「照井はなにもわかってないな。こっちのシリーズのほうが微妙に現実味があって面白い」

「なんの話？」

二人を見つけた私は会話に混ざりつつ合流。

「お、君子。オハヨー。今ね、長谷川くんとこのアニメについて討論してたの」

「なんだ。照井が呼んだのか？」

「まぁね。このあと君子の家に行くし」

「そうだったのか。おはよう、吉野」

「うん。おはよう。二人とも、もう夕方だけどね」

時刻は午後3時をすぎている。

「で、どのアニメ？」

「これ」

そう言って明子が指したのは、脳が電脳化された世界でなんやかんやする警察のお話だった。

明子が好きなのは2期目のほう。テロリストとそれを追う警察の人の話。

長谷川が好きなのは1期目のほうで、天才ハッカーと警察の話。

ちなみに私は長谷川派。

それを伝えると、明子姫はご立腹のようだった。

「なんじゃそれは！後から来た人間に投票権なんぞないぞよ！」

「さすが吉野だ。見る目があるな」

同時に非難の声と称賛の声をいただいた。

光栄でもあり残念でもある。地味に複雑な気持ちだ。

「そういえばうち来るの？」
「まぁ妹ちゃんに呼ばれちゃったしね」
「ふ、ふーん。じゃあ行こっか？」

家を出る前の出来事を思い出して少し怖くなった。
家に帰ったら明子はどうなってしまうのだろうか。

「そうか。なら俺も帰るかな。欲しいのも買ったし」
「へー。何買ったの？」
「ラノベの新刊。ホントは街中の専門店とかに行けばポイントとか特典とかついててお得なんだろうけど、そこに行くまでの電車賃だけで、本がもう一冊買えるからな。特典よりは量だ」
「へー。意外。長谷川って特典とか集めてるようなイメージだった」
「最初のころは集めるために、そーゆー店を回ったりもしたんだが、特典って地味に困るんだ。もらっても使い道がないしとっておいても捨てるのが勿体ないって思っちゃって捨てれなくてドンドンたまってくんだよな」
「あーわかるわ。最初はファイルとかに挟んでいくんだけど、だんだんファイリングするのがめんどくさくなってくるんだよね。早く本も読みたいし」
「はーい！ちょっとストップー！お二人さん。そろそろ行きませぬか？私も生徒が待っているんだが？」

盛り上がってきた長谷川との会話を断ち切るようにケータイの画面を見せてくる明子。

『明子さん。まだですか？一美、待ちくたびれますー』

うわー。なんかブリブリしてるー。
一美ってこんなメール送ってるの？

ちょっとイメージと違うわ。

「というわけで、続きは君子の家でしなさい」

「えっ！？」

口から心臓が出そうになった。いや、一瞬出て戻ったかもしれない。
明子め。最初からこれが狙いだったのか・・・策士め。
それでも心の中で喜んでいる自分が憎いぜ。

「行ってもいいのか？」

「は、長谷川がいいなら来れば？」

「なんでツンデレ？」

「そうか。ならお邪魔させてもらうかな。話すことも山ほどあるからな」

お前どんだけ溜め込んで生活してるんだよ！
もちろん声には出さずに心の中でつっこむ。
それだけ友達がいないってことなのだろう。
友達がいたとしても長谷川の会話についてこられる人種はあまりいないのかもしれない。
そう考えると、私ってオタクで良かった。
思わずニヤける。

「うわー。君子きもーい」

横で明子が何か言っているが、どこ吹く風のごとく無視。
じゃあ行こっか、と言って二人を誘導するように店を出る。
私は駐輪所に止めてある愛車のエクストリームサイクロン号。
明子は電車なので徒歩。
長谷川も自転車。

「照井は歩きか。俺の後ろに乗るか？」
なんですと！？
長谷川の自転車の後ろには荷台がついていて（いわゆるママチャリ）、そこに二人乗りすることができる。

「えー。私重いしー」
「大丈夫。鍛えてないけど力はあると思う」

クネクネしながら言う明子と、それを明らかにツッコミ待ちのボケで返答する長谷川。
私はどうするべきなんだ？
？　みんなで歩いて帰る。
？　長谷川の後ろに乗っている明子を羨ましく思いながら帰る。
？　「明子じゃなくて私を乗せて！」と言って変わってもらう。
？　明子だけ歩いて帰ってもらう。
うわー。もしも私の脳が電脳化されていて、明子とテレパシーまがいのことが出来たとしたら、多分明子の手によって？にさせられると思うし、かと言って何もしなければおそらく？になることは間違いない。
どうする？どうする私！
あ。思いついた。

「明子。私のに乗りなよ」

そうだった私の後ろにも荷台付いてるんだった。
もっと早く思い出していれば考えなくてもよかったのに。

「あら、そう？君子ちゃんに甘えちゃおうかしら？」

「でも前は明子に譲るけどね」
「殺生なー！」
「重いと思うんならなおさら痩せろ」

そんなに明子自身のことは重いとは思えないけど、自己申告してるなら仕方ないな。
そんなこんなで正解は？の『明子が私を後ろに乗せてムサイ号で帰る』でした。

エクストリームサイクロン号（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

すでにわかる人にしかわからないネタの応酬となっていることをお詫び申し上げます。
ですが次回のほうが酷いかも知れないことを先に謝っておきます。
ごめんなさい。

ということで次回もお楽しみに！

デレ期

現在。午後４時。
場所。吉野君子宅。
状況。長谷川と君子の部屋にて二人きり。私が勉強机の椅子、長谷川は前回同様クッキー型クッションの上に座り本棚を物色中。明子は一美の部屋。
感情。ものすごいドキドキ。
表情。ニヤつく顔を抑えるのに全力全開。
行動。椅子の上に座ったまま楽なポーズ。

うん。大丈夫だ。問題ない。
内面は大変なことになってるけど、いつも通りの私にしか見えないはずだ。
明子は明子で、あの一美の元へ何も知らずに行ったのだから心配ではある。
しかし今は自分のこと最優先だ。
それにしてもホントに来るなんて・・・
長谷川も女子高生の部屋にお邪魔するんだから、なんかちょっとは遠慮とかなんかそーゆーのをして欲しい。
でもそんな長谷川が良いわけであって。
・・・きゃー！私ってばなに言ってるんだろ！
頭の中で顔を押さえて悶える私。
そんなことばかり考えていて、ニヤける顔を長谷川には見せられないと思い、表情筋をフル稼働させている。
三次元でもモザイクとかつけれたらいいのに。

「そういえば知ってるか？」
「え、えっ！？何！？」

「・・・大丈夫か？」

急にノーモーションノールックで話しかけられたから声が裏返ってしまった。

長谷川のバカ。話しかけるなら話しかけるって言ってよ！

「大丈夫だ！問題ない！」

「いい装備は出せないけどな。それでだ。この漫画が来年の春にアニメ化するって知ってたか？」

「アニメ化？もうするの？」

長谷川が見せてきた漫画はまだ3巻までしか発行されていない漫画だ。

「らしいぞ」

「でも私アニメってそこまでチェックしてないからわかんないなぁ」

「俺も知らなかったんだが、たまたまネットで見かけてな」

「ネットか・・・」

一応この部屋にもノートパソコンがある。

もちろんニコニコできる動画サイトかアニメを見るぐらいである。

公式サイトとかブログとかも何も見ないからパソコンさんがかわいそうと思う日もある。

だがそれも仕方ない。

だって見たいものがないんだもん。

「それはそうと吉野さん」

「なんですか長谷川さん」

「ひとつお願いがあるんですが」

「お願い？」

急に改まってお願いって・・・
もしかしていくら二人きりだからってエッチなお願いとかは

「この本貸してもらえませんでしょうか？」
「・・・で、ですよねー」

長谷川に限ってそんなことするわけないよねー。
私の脳みそが腐ってやがる。

「やっぱりダメか？」
「いやいや全然いいけど、どれ？」
「これだ」

長谷川が本棚から一冊抜き取ったのは少女漫画だった。
でもまだ3巻までしか出ていない。

「それがいいの？まだ巻数も出てないんだし買えばいいのに」
「いやその・・・しいじゃ・・・」
「え？なんだって？」

横を向いて急に小声になる長谷川。
何言ってるのかわからないので、椅子から立ち上がって身を乗り出す。

「だからその・・・恥ずかしいじゃないか」
「は？」
「この歳にもなって少女漫画をレジに持っていくとか恥ずかしいだろ？」
「だろ？って聞かれても、私は女だし恥ずかしいなんて思ったこと

もないからわからないし。それに店員さんとかだって気にしないと思うよ？」
「いや、それは分かっているんだが・・・」

何この生き物。
超可愛いんですけど。
無表情なくせに微妙に赤くなって恥ずかしがってるし。
うわー頭撫でてー。

「吉野？」
「長谷川・・・可愛いな」
「・・・は？」

やばい！つい口に出しちゃった！
これどうしたらいいんだ！？

「吉野・・・可愛いってどういうことだ？」
「いや、その、頭の中で考えていたことが口に出てしまったというかなんというか・・・」
「もしかして吉野・・・俺のこと・・・」

嘘っ？そーゆー展開！？
まだ早いって！

「俺のことＢＬのネタにしてるのか？」
「いや、実は・・・えっ！？いやいや！してないよ！そんなことしてないよ！」
「なんだよその慌て方は。絶対にしてただろ」
「してないってば！私ＢＬとか興味ないし！」
「本当か？なら信じるけど」

うはービックリした。
二重の意味でビックリしたわ。
顔が熱くなったので両手で顔を仰ぐ。
まさかそんなこと考えていたとは。
でもなんかもったいないことしたなぁ。

「それにしても吉野はＢＬとかは読まないんだな」
「一応知識とかはあるけどそんなに興味がないかな。もしかしてまだ疑ってるの？」
「吉野を信じるよ。女のオタクっていったら半分以上がＢＬ好きのような気がしてたんだ。だから吉野もなのかなと思ってな」
「じゃあ長谷川は興味あるの？」
「勘弁してくれ。兄さんみたいに年の近い兄弟がいると抵抗がありすぎてダメだ。しかも双子だとなおさらだな」

もし長谷川と鳴海さんなら鳴海×長谷川かな？
でも鳴海さんは誘い受けとかもできそう。
長谷川は無表情で落ち着いてるから攻め？
でもさっきのあの恥ずかしがってるところを見ちゃったから受けにしか見えなくなってきた。

「吉野。今考えてたことを全部話してみろ」
「げ。マジですか？」
「俺は怒らないから話してご覧」

すごい満面の笑顔（演技）でこちらを見てくる長谷川。
椅子から降りて正座をする私。
大人しく全部吐いて楽になろう。

デレ期（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

さてさて長谷川をデレさせてみました

次回は一美のターンです。
次回もお楽しみに！

Q&’A

正座で長谷川と鳴海さんの関係を恥ずかしく語らされた。
なんで私がこんな目に・・・
長谷川が振った話じゃんかよー。

「吉野が俺と兄さんのことをそういうふうに見ていたなんて少し心外だな」
「もとはといえば長谷川から聞いてきた話じゃんか」
「それとこれとは全くの別問題だ」
「ずるいー」
「じゃあお礼に吉野の質問にもひとつだけ答えてやるよ」

なんでも答えてくれるのか。
何聞こうかなぁ。好きな女の子のタイプとか聞こうかなぁ。
でももしも私と全然違うタイプの子が好き、とか言われたら耐えられないからやめておこう。
うーん。聞きたいことはたくさんあるけど・・・

「なんか三つぐらいに増えないの？」
「そ、そんなに聞きたいことがあるのか？」

少し驚いた様子の長谷川。
そりゃもちろん好きな人のことなら沢山知りたいと思うのは自然の摂理だ！なんて言う度胸はないので、

「長谷川のこと全然知らないからね」

と軽くごまかしてみる。

「そんなことないと思うぞ。俺は結構吉野に話してると思う。逆に何を知ってる？」
「長谷川隆夫。高校３年生。成績優秀。オタク。ジョジョラー。双子の兄の鳴海さんがいる。ゲーセン大好き。以上」
「それ以外で他に何か聞きたいことあるのか？」

何か問題でも？と言う感じで聞いてくる長谷川。

「いやいやあるでしょうよ。例えば好きな食べ物とか」
「リゾット」
「好きな季節とか」
「秋」
「嫌いな物とか」
「暑苦しい人」
「・・・好きな動物」
「犬とたぬき」

質問（？）に対して速攻で返してくる長谷川。
これは負けられない。
ここまで来たら長谷川が止まるまで質問攻めにしてやる。

「好きな筆記用具は？」
「ボールペン」
「好きな国は？」
「日本」
「好きな外国映画は？」
「ＴＡＸＩシリーズ」
「好きな日本の場所は？」
「我が北海道」

「好きな男のキャラは？」
「インテリメガネ」
「じゃあ好きな女のキャラは？」
「黒髪ロングの委員長タイプ」
「好きなタイプは？」
「炎タイプ」
「いや、そうじゃなくて・・・」

なんでポケモン。
ネタが思いつかなかったから、さりげなく聞いてみたらすごい返され方をした。

「なんだ終わりか？じゃあ今度はこっちのターンだな」
「ちょっとまだエンド宣言してないし！」
「アニメだとスルーは基本だぜ！俺のターン！」

まさかの攻守交代！
落ち着く時間をください！！

「好きな食べ物は？」
「えっと、いちご」
「好きな季節は？」
「あー、春かな」
「好きなキセルは？」
「キセル！？えーっと・・・チェーンキセル！」
「嫌いな食べ物は？」
「ドロドロになるまで煮込んだ鍋焼きうどん」
「好きな動物の森のキャラは？」
「やったことないからわかんないし！」
「動物の森のキャラは？」

「えーっと・・・たぬ吉だっけ？あの店員」
「よく知ってるな。じゃあ好きな男キャラは？」
「ＤＩＯ様」
「嫌いな男キャラは？」
「体育会系の先輩」
「好きな男のタイプは？」
「優しくて話の合う人」
「好きな女のキャラは？」
「明るく元気なキャラ」
「嫌いな女のキャラは？」
「いじめっこ」
「よし。わかった」

ふう。前半は変則的過ぎたわ。
後半はスムーズに答えられた気・・・が・・・す、る・・・。
あれ？もしかして私やられた？

「吉野の好きなタイプは優しくて話の合う人か」
「ちょっと、それはあくまでタイプの話であって・・・」
「いやいや。この耳で確かに聞きましたから」
「いや、ちょっと、その・・・」

なんて答えたらいいんだ？
あの無表情の長谷川が、ここまで口元をニヤつかせてるのなんて初めて見たわ。
それでもここまで言っておいて『長谷川は好きじゃない』とは言えないし、かと言って長谷川に別の好きな人がいたら困るし・・・
うわー。マジでどうしよ。

「じゃあ攻守交代で、次は吉野の番だ。でもラストターンだから質

問は一つだけな」

なにそれ。
もしかして狙ってたとか？
いやいや、長谷川がそんなことを考えるはずがないよ。
だって私のことなんてただの気の合うオタク友達としか思ってないはずだもん。
でもこの展開は・・・
ええい！ままよ！どうにでもなれ！

「は、長谷川のす、好きなタイプは？」
「ほっとけなくてオタクで話の合う人」

あーやっぱり。

「じゃあ俺のターンだな。俺のこと好きだろ？」

落ち着いた声で質問してきた長谷川を見つめる。
ずっと無表情で居てくれたら助かるのに、こういうときだけ微妙に微笑みが入るのさ。
その顔にやられたんだからちょっとは自覚して欲しい。

「質問には3秒以内で答えてください。好きですか？」
「うん」

なんでこいつはいつも上から目線なんだ。
もう・・・それでも好きだから仕方ないな。

「俺も吉野が好きだ」

その言葉を聞いて少し嬉しくなった。
出会いこそよくわからなかったけど、今こうしてまた告白されているわけだ。
あの頃と気持ちは全然違うけど、長谷川と出会えてとても良かったと思う。

Q&A（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

もうだめですね。
キャラ達が相変わらずの大暴走。
ついに告白しちゃいました。
ソウテイガイデス。

まだ続きますので次回もお楽しみに！

本音

「好きって・・・ホント？」
「こんなところで嘘ついてどうするんだ」
「だよね・・・」

こんなにあっさりでいいのだろうか？
私はそう思った。
少しだけ、ほんの少しだけ正樹のことを思い出した。
正樹の時もなんかこんな感じだった。
流れと勢いで付き合ったからあんなことになってしまったのかもしれない。
今回はどうなんだろ？
どうしてもあの時と比べてしまう。
本当に心から人を信じれないのは、やっぱり正樹との出来事が原因なのかもしれない。
正直、人と付き合うのが怖い。
でも長谷川なら大丈夫・・・？
よくわからない。
時々、心の中で無意識に自問自答している自分がいる。
いつも答えは『わからない』だ。
でも長谷川なら・・・と考える。
私の中では長谷川は特別なのだ。
単に話が合うからとか長谷川が優しいからとかではない。
私は長谷川の雰囲気が好きなのかもしれない。
きっと居心地がいいのかもしれない。
もしかしたら私が思っている以上に長谷川は変な奴かもしれないけど、それでもいいのかもしれない。
『かもしれない』は裏を返せば『わからない』と一緒だと思ってい

る。
本心では信じたいけど、心の奥では疑っているのかもしれない。
なんか考えれば考えるほどよくわからなくなってきた。
つまり、長谷川の言葉を信じていいのかわからないということだ。

「もしかして不安なのか？」

なんで長谷川は私の考えていることが分かってしまうのだろうか？
長谷川のこういうあざといところも好きなところだ。

「そう見える？」
「何回も言うようで悪いが、吉野は辛かったり不安な時は隠すタイプじゃないか？そこが心配なんだ」
「まぁ・・・もしかしてそれって同情してくれて好きって言ったの？」

なんでこんなことを言ってしまうんだろう？
さっきまであんなに嬉しかったのに、急に怖くなってきた。

「最初は同情だったかもしれない。でもだんだんと吉野が不安な顔をしていると俺まで悲しくなってくるんだ。逆に、吉野の笑顔が見れたときは俺も嬉しい気持ちになる。つまりなにが言いたいのかって言うと・・・吉野には常に笑っていて欲しいんだ」

やっぱり長谷川は優しいと思う。
ホントに心配してくれてる。
それに比べて私は・・・。

「ありがとう。私もこんなに心配してくれてる長谷川のこと好き。でもなんかうまく受け止められてない」

「どういうことだ？」

長谷川にはホントのことを話そう。
今決めた。
心配してくれている長谷川のためにも素直になろうと思った。
それで好きじゃなくなるなら仕方ないと思う。

「実は正樹のことがあってから、少しだけ人間不信になってるんだ。誰も信じられないってゆーか・・・あ、でも長谷川と明子は別だよ？」

長谷川は何も言わずに、クッションの上にあぐらをかいていつもの無表情で聞いている。

「そしてさっき長谷川に好きって言ったら、長谷川も私のこと好きって言ってくれたじゃん。嬉しかった。でもそれをホントに信じていいのかわからない自分がいるんだ」

だんだん自分がクサイセリフになってきていて、こんなキャラじゃないよなーとか思った。
それでも静かに聞いてくれている。

「でね。多分正樹のことがあったから少し怖いんだと思う。なんていうか恋愛に臆病になってるってやつ？人間不信の延長みたいなもんだと思う。だから長谷川のことは好きだし、大好きだけど、そーゆー関係になるのが怖いんだと思う」

全部言い切った。
長谷川の反応を待つ。
これが私の気持ちです、と言わんばかりの熱弁だった。

我ながら熱く語ったと思った。

「吉野」

長谷川がゆっくりと口を開いた。

「俺は人を好きになったのは初めてだ。だからこれが恋愛感情なのかそれとも同情心からなのかは、正直わからない。でも俺は吉野が好きだ。さっきも言ったが笑顔で居て欲しい。できることなら俺のことを信じて欲しい。俺に対しては素直であって欲しい。俺は吉野といると楽しい。こんな気持ちは初めてだ。それだけだとダメなのか？もっとちゃんとした理由が必要なのか？」

なんか心臓をズカン！と撃ち抜かれたようだった。
長谷川の素直でまっすぐな想いが私の心に響いた。
そうだ。そんなに難しいもんじゃない。
素直に簡単に考えてみたら意外と答えはあっさり出た。

「私・・・長谷川が好き。大好き。もっと楽しいことしたい。一緒に話したい」
「俺も吉野といろんなことがしたい。俺も吉野のこと大好きだよ」

長谷川の柔らかい笑みを見ると、嬉しくてすこし泣きそうになった。
でも泣き顔を見せるのはなんだか恥ずかしかったので必死でこらえた。
こんなにも互いの気持ちが通じ合うことが嬉しいことだとは思わなかった。
正樹のときとは全然違う気持ちだった。

「でも俺はシャイで恥ずかしがり屋だからうまく笑えないんだ」

「雰囲気ぶち壊すなよ！長谷川はそのままの笑顔で十分だよ」
「そう言ってもらえると助かる。じゃあこれからもよろしくな。吉野」

そう言って手を差しのべる長谷川。

「握手なの？ここは引き寄せて抱きしめてくれるんじゃないの？」
「ほら。シャイだから」
「そこは頑張れよー」

呆れて笑いがこみ上げてきた。
長谷川の握手に応じると長谷川も少し笑う。
顔を上げて長谷川を見ると目が合って、顔が少し赤くなったのがわかった。

「な、なんで笑うのさ。握手を求めてきたのは長谷川でしょ」
「やっぱり吉野には笑顔が似合うよ」

だからその顔は反則だってば。

本音（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変感謝感激します。

またここで一段落しました。
いい感じですね。
純粋な長谷川に惚れそうでした。

次回もお楽しみに！

あこがれの人（一美視点）

私が明子さんと出会ったのは小学校5年生の時だった。
成績そこそこ。運動そこそこ。人間関係そこそこ。
人生そこそこだった私は小学5年にして恋愛というものに興味を持ち始めていた。
お姉ちゃんはオタクで恋愛というものに関しては全然興味がないみたいで、テレビではアニメ、部屋では漫画とか小説とかを読んでいるような典型的なオタクだった。
お姉ちゃん曰く『こんなにかっこいい人は二次元の中にしかいないんだから一美も男を見るときは気を付けなさい』と言われていた。
私はなんだかんだ言ってもお姉ちゃんのことが好き（もちろん家族として）だったので、気を付けて男を見るようにしていた。
見れば見るほど同学年の男子はバカばっかりだった。
好きな子にいたずらをする子もいれば、ずっとよくわからないことを話している子、余ったヨーグルトをめぐって行われるじゃんけん大会。
そんなことをする男子には全く惹かれなかった。
同じクラスの友達もあの子がカッコイイとか素敵とか言ってるけど、私は所詮小学生なんて子どもだな、とみんなからは少し引いた視点で物事を見るようになっていた。

そんなある日の日曜日。
お姉ちゃんが珍しく友達を連れてきたのだ。
知っているだけでも、お姉ちゃんが友達を家に連れてきたのは初めてだった。
私も仕事が休みで家にいたお母さんもお父さんも、珍しそうな顔でお姉ちゃんの横に立っている人を見た。
最初は全然興味が無くて、お姉ちゃんの友達っていう括りでしかな

かった。
でもしばらくして、隣のお姉ちゃんの部屋から楽しそうな声が聞こえてくるのが少し気になっていた。
お姉ちゃんがあんなに楽しそうに笑いながら家族以外の人と話しているのを聞くのは久しぶりだった。

「私の知らないお姉ちゃんが楽しそうに話している」

そう思った私はこっそりお姉ちゃんの部屋を覗いてみた。

「アハハハ。やっぱりあそこのシーンは笑えるよねー」
「わかるわかる！でも君子なら主人公が活躍してるシーンのほうが好きなんでしょ？」
「さすが明子！なんでわかったし！アハハハ」
「そりゃ友達だからな！アハハハ」

友達の名前は明子さんというらしい。
あとから聞いた話だけど、お姉ちゃんと明子さんは同じ高校のオタク仲間らしい。
たまたま同じ作品が好きで意気投合したって言ってた。
そのまましばらく覗いていた。
その時明子さんが突然振り向いて、ドアの隙間から見えていた私を見た。

「曲者っ！」

その声に驚いた私は尻餅をついてしまい、ドアを開けた明子さんに捕獲されてしまった。

「あれ、一美？見てたの？入ればよかったのに」

「妹ちゃん？」
「一美。妹で今５年生」
「５年生？随分な幼女だな」
「よ、幼女じゃないです」

驚きから立ち直ってからの第一声がこれだった。
今思い返すとちょっと恥ずかしい。

「妹ちゃんは大人っぽい顔してるから幼女向きではないかな」
「でしょー？一美ってば妙に大人びた考え方でさ、こないだも恋愛って何？とか聞いてくるんだよ」
「最近の子はそんなこと聞くのか」
「そう思うでしょー」

二人は私のことでまた笑いあってた。
なんかバカにされているような気がして反論してやった。

「じゃあ恋ってなんですか？」
「うーん。私も恋ってしたことはないからちょっとわからないけど、恋っていうのは落ちるものなんだよ。わかる？」
「落ちるもの？」
「うん。気づいたら頭の中がその人で一杯とかそんな感じ」

笑顔で私に向かって言う明子さん。

「恋愛未経験者が何を言ってるんだ！」

部屋の奥からお姉ちゃんの声が聞こえた。

「私の理想だ！まだ相手はいないけどね！言わせるな！」

そのあと二人がいろいろと笑ってたけど、私は明子さんが言っていた言葉を考えていた。
落ちるもの。
その時はまだ全然ピンとこなかった。

次の日。
学校で不思議なことが起きた。
いつもと同じ風景のはずなのに、何か物足りなさを感じるようになっていた。
今日も友達がカッコイイ男子の話とかしているが、全然頭に入ってこない。
授業も全然聞こえてこない。
その原因は明子さんにあった。
頭の中が明子さんのあの笑顔で一杯だった。
しかも思い出すたびに胸がキュッって締め付けられるような感じがする。
私は明子さんの言葉思い出しながら思った。

「これが恋ってやつか」

その日以来、私は明子さんに会えるのが楽しみで楽しみでたまらなくなった。
お姉ちゃんがトイレとかで居なくなる隙を見計らっては、明子さんに写真を撮らせてもらったりもした。
もちろん「買ったカメラの枚数が余ったので撮ってもいいですか？」と断りも入れているから盗撮ではない。
あの明子さんの笑顔を見ると安心する。
今では部屋に一人で居る時は、机の横の壁にかけてある大きめのコ

ルクボードいっぱいに笑顔の明子さんの写真が貼ってある。
さすがに恥ずかしいので、誰か来るときは必ず隠している。

今日は明子さんがうちに来て勉強を教えてくれている。
そんなに難しい問題ではないんだけど、明子さんと二人の時間を共有してみたかったから、お姉ちゃんには内緒で思い切って誘ってみた。
でもそんなワクワクしていた日に限って、お姉ちゃんにあのコルクボードを見られてしまった。
ちょっと怒っていたけど、明子さんの笑顔を見るとどうでもよくなってしまった。
ところでお姉ちゃんが前にも来た男の人と一緒だけど、あの人は彼氏なのだろうか？
そのことを明子さんに聞いてみたけど、うまくごまかされてしまった。
まぁいいや。今度聞いてみよう。
今は明子さんと二人きりの世界を楽しもう。

あこがれの人（一美視点）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回は一美のターンでした。
本当は本屋から三人が帰った回のあとに入れるつもりだったんですが、うっかり順番を間違えてしまったので、閑話代わりの話になってます。

次回もお楽しみに！

お付き合い

長谷川からの告白・・・私からしたことになるのか？
よくわからないけど、お互いの気持ちを伝えあってから1週間が過ぎた。
この1週間、何もなかった。
付き合ったばかりだからもっとイチャイチャしたりするのかと思ったけど、一日に何回かメールをするだけで、特に何もしていなかった。
互いに受験生というのも関係しているのかとも思ったけど、お互いに成績は悪いわけでもないので意外とのんびりだった。
私はここ数日で行きたい大学を決めた。
実は前々から興味があった心理学が専攻できる大学に進むことに決めた。
元々文系のクラスだったから、心理学を専攻するには問題ないし、成績も問題ない。
あとは復習と応用問題を繰り返し解いていけば落ちる心配は無いと思う。
このことを長谷川にメールで教えると、『吉野にもやりたいことが出来たのはいいことだお。少し羨ましすｗｗ』と返信が来た。
長谷川は未だにやりたいことが見つからないらしい。
成績が良くてもやりたいことがなければ宝の持ち腐れだ、と長谷川自身が前に言っていた。

「長谷川ならなんでも出来そうなんだけどなぁ」

私から見れば、長谷川は万能人間だ。
でも万能すぎて突出したものがないからしたいことが見つからないんだと思う。

前に大学の話をメールでしていたときに、『大学でしたいことが見つかるかもしれないから、とりあえず大学に行くでござるｗｗ』と言っていた。
意外と簡単な脳の構造をしているので、どこの大学に行くかというのはそんなに気にしていないみたいだ。
色々と考え事をしながら道を歩いていると、あっという間に長谷川の家の近くまで来ていた。
今日は長谷川の家で勉強会を予定しています。
この間貸した少女漫画を返してもらおうとメールをしたら、なんやかんやで勉強を教えてもらうことになった。
なんせ学年トップの成績を誇る人間が勉強を教えてくれるというのだ。
断る理由がない。山田由花子式授業（超スパルタ）だったら怖いな。
私は参考書とかペンケースとかを入れたカバンを持って、道をてくてくと歩いていた。
ちなみに私と長谷川の家は遠くはない距離にある。
しかし中学校はギリギリ違う学区だったために互いのことは知らない。
高校と私の家と長谷川の家を結ぶと綺麗な正三角形ができる位置にある。
実際に長谷川の家は行ったことはないけど、近くの公園なら知っているので、そこで待ち合わせをしている。
やっとこさ公園が見える距離まで歩いてきた。
いくら近くとはいえども、歩いて３０分の距離は地味に遠かった。

「こんなことならムサイ号でくればよかった」
「むさいごう？」
「うひゃあ！」

いきなり背後から声がしたので思わず変な声が出てしまった。

長谷川には背後に忍び寄るスキルがあるのを忘れていた。

「きらい・・・ごう？」
「もう！ビックリさせないでよ！」
「あぁ。すまない。ちょっと驚かせようと思って」
「予想以上に驚いてるから大成功だよ！」

この野郎め！今回は悪気たっぷりだったなんて・・・非常に悔しい！

「・・・・・・」
「ん？長谷川？どうしたの？」

急に黙って考え事をしているように見えたので声をかけた。

「もしかして吉野はゲームとかはしないのか？」
「え？ゲーム？」

確かにあんまりしないけど、なんで急にゲーム？
そのことを長谷川に伝えた。

「そうか。だったら今日はゲームをしよう」
「えー！勉強は？」

自分から言っておいてゲームに誘うとは何事か！

「本音を言うと、吉野と同じ部屋に二人きりでいて、勉強を出来るかと言われれば、きっと集中力がもたないと思う」
「その心は？」
「緊張してうまく教える自信がない」

長谷川の顔が少し赤くなるが、相変わらずの無表情で言う。
どういう表情筋の使い方をしたらそこまで無表情が保てるのか不思議だ。
私なんか長谷川のそんな表情を見ただけで、余裕でニヤけちゃってるよ。

「・・・変なコトしないでよ？」
「そこは安心してくれ。簡単に手を出さない自信はある」
「変な自信持つな。・・・ってゆーか緊張してるの？」
「まぁな。こう見えてもかなり緊張してるぞ」

ホントに無表情でわかりにくいやつだな。

「そういえばなんでゲームの話が出てきたの？」
「俺が『きらい・・・ごう？』って言っても反応しなかっただろ？」
「あれってゲームのネタだったの！？」

さすがの私もそこまでは手が回らない。
漫画とアニメだけで勘弁してください。

「だから是非プレイしてもらおうかと」
「そこまで言うなら別にいいけど、どんなゲーム？」
「カメラで敵を倒すアクションゲーム」

なんとも変わった設定のゲームだこと。
なんだろ？殴って倒すのかな？

このとき私はまだ知らなかった。
このあと私に襲いかかる恐怖がいかに恐ろしいものであるかを。

お付き合い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

地味に久々な日常です。
長谷川くんの守備範囲はかなり広いです。

では次回もお楽しみに！

恐怖体験

「ギャーッ！！」
「アハハハハ！！」

現在、長谷川の家でゲームのプレイ中。
さっきの悲鳴が私。笑い声が長谷川。
長谷川が爆笑してるところなんて初めて見たけど、そんなレア度の高い長谷川を見る余裕もないぐらいゲームに集中している。
いや、集中せざるを得ない状況になっている。
むしろ画面から目が離せない。

「ううっ・・・怖いよぉ」
「吉野はやっぱり面白いな！」

現在、ホラーゲームをプレイ中。
私がコントローラーを握って、隣で長谷川が過去最大級のハイテンションで笑っている。
くそっ！長谷川め！私を騙しやがった！
何がカメラで戦うアクションゲームだ！
だいたいあってるけど根本的にホラーゲームじゃないか！
バカ！長谷川のバカ！

「怖いならやめるか？」
「こんな中途半端なところでやめたら夢に出てくるから！」
「そんなに怖いのか？この幽霊なんてかわいそうな過去を持ってるんだぞ？」
「ちょっとやめて！今こいつのことをそんな哀れみの目で見れない！ただの恐怖の対象にしか見えないから！！」

さっきから後ろを追いかけてくる、鉈をもった血まみれの神官みたいな幽霊の解説をはじめようとする長谷川を制止してゲームに集中する。

「あ、そいつは近づいてカメラの威力上げて倒さないと」

「近づくとかムリムリ！絶対やられるって！」

操作には慣れてきたんだけど、ホラーゲームならではの、急に来る恐怖と誰も居ないはずなのに背後から感じる謎の視線が怖すぎて変な汗が出てくる。

これ絶対見られてるよね。

雰囲気出すためとか言って閉められたカーテンの隙間が気になる！

「『贄（にえ）の儀式に従えー』」

長谷川の声とゲームの音声がだぶって聞こえた。

どんだけやり込んでるんだよ！

「ちょっと！疲れてきたんだけど！休憩したいんだけど！」

「え？憑かれた？」

「発音的にそれ漢字違う方だよね！私取り憑かれてないからね！だ、大丈夫だよね？」

何度目かのセーブポイントでセーブすることに成功した私は、コントローラーを膝の上に置いて一息ついた。

マジで怖かった。何度叫んだことか。

今日は誰も家に居ないらしく、長谷川と二人きりだった。

正直彼氏の家に初めて来て、悲鳴ばっかり上げてるところを見られなくて良かった。

第一印象が最悪になるところだった。

「今日はもうやめるか？」

「私はもうできない。やるなら長谷川がやってよ。私横で見てるからさ」

「なら続きはまた今度だな」

「もう勘弁してくださいよー」

「だが断る！」

「なんでさ！」

「面白いからだ。それにまだきらいごうまで行ってない」

「きらいごうは違うシリーズだろ」

「ぎゃうっ！」

急に別の声がしたので、驚いてしまい変な声が出てしまった。

その声がした部屋のドアの方を見ると、鳴海さんが壁に寄りかかって立っていた。

「あ、あれ？なんだ、鳴海さんか」

「兄さん。いつ帰ってきたんだ？」

「ちょっと前にな。なんか凄い悲鳴が聞こえたから見に来たんだけど・・・吉野ちゃんとそれやってたのか」

「吉野がやったことないって言うからやらせてた」

「鳴海さんー。助けてくださいよー」

「ダメダメ。そーゆーことは彼氏の隆夫くんに言わないと効果がないぞ♪」

「あ、鳴海さんは知ってるんですね」

「まぁねー。隆夫が嬉しそうな顔して帰ってきたもんだから、ちょっと聞いてみたら教えてくれたぞ」

「嬉しそうな顔・・・」

その言葉を聞いて長谷川の顔を見る。
相変わらずの無表情だ。
なんとなく喜んでるとかはわかるけど、微妙な表情だけで嬉しそうとかを見抜くのはちょっと難しい。
そこらへんはやっぱり双子のパワーなんだろうか？
私も今後は見抜けるように努力していこうと思う。

「なんだ？なんかついてるか？」
「いや、長谷川の嬉しそうな顔ってどんなんだろって思って」
「嬉しそうな顔か？今は割と嬉しいぞ？」
「いつもと変わらないじゃん」
「アハハハ。まぁ吉野ちゃんも隆夫も精進したまえ。じゃあ俺は部屋に戻るから。あとは二人でごゆっくりー」

そう言って部屋から出ていく鳴海さん。
二人でその背中を見送った。
そして訪れる沈黙。
沈黙に比例するかのように急にドキドキしてきた。
よく考えると、同い年の男子の家に来たのって初めてかもしれない。
正樹の時も行ったことなかったから、長谷川の家が初めてってことになる。
そのせいもあってかドキドキが加速している。
もうすぐで心臓にセカンドブリッドが決まりそうだ。
そんな私に対して長谷川は安定の無表情である。
この鉄仮面め。
私にもその表情筋の使い方教えろ。

「吉野」
「何？」
「べ、勉強するか」

声が上ずっている。
やっぱり長谷川も急に緊張が押し寄せてきたみたいだ。
それを誤魔化すために勉強しようといったのだろう。

「そ、そうだね。本来の目的はそっちだったし」

そう言って部屋の真ん中にあるちゃぶ台に二人で向かい合って座った。
カバンの中から参考書を取り出して、教えて欲しかったページを開く。
教科は数学。
実際問題、他の科目はほとんど暗記問題ばっかりだから、教えてもらわないと理解できそうにないのは数学だけだった。
文系だから物理とかの変な記号とか計算とか使うのも無いからホントに数学だけ。
用意が終わったので、向かいにいる長谷川の方を見る。

「長谷川さん・・・」
「なんだ？」

ホントに緊張してるんだ・・・
いや、ボケてるのか？

「それ算数の教科書じゃん」

ハッとした長谷川は教科書を横に置き、慌てて私が出している参考書を見て無表情で言う。

「どこがわからないんだ？」

「長谷川の頭の中がわからないよ」

恐怖体験（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

一家に一台長谷川が欲しいです。
次回からまた話が動きます。

では次回も楽しみにお楽しみに！

夏休み終了

８月下旬。
本州よりも短い北海道の夏休みが終わる。
この夏休みは受験生の割には色々と楽しめた。
ケータイも買ったし彼氏も出来たし長谷川の家にも行ったし明子とも遊んだしｅｔｃ。
他人から見たらどうなのかはわからないけど、私なりには充実した夏休みだったと思う。
そういえば明子と遊んだ時に長谷川と付き合い始めたことを伝えたら泣いて喜んでいた。
どうやら私が正樹の呪い（？）から開放されたのが嬉しすぎて思わず泣いてしまったらしい。
私はいい友達を持ったものだ。
これからも大事にしていこう。
明子といえば一美だけど、私に『明子ＬＯＶＥ』がバレてからは私によく明子のことを聞いてくるようになった。
ついにデレ期に突入したのかと思って、あれやこれや聞いてみたら、極上のツンで返されるばかりだった。
まったく、実の姉をなんだと思ってるんだ。明子の親友だぞ？
あんまりツンばっかりだと明子にあることないこと吹き込んでやる。
そして長谷川だ。
夏休み中に何回か勉強会と称して会っていた。
未だに期待しているような展開には一度もなっておらず、キスどころか手を繋いだことすらない。
でも私も長谷川も互いにそんなことにはあまり興味がなくて（私の方は全くないわけじゃない）、ただ一緒に過ごす時間を楽しんでいた。
別にこのままのんびりと付き合っていければ、私はそれでいいんだ

けどね。
一応勉強会なので勉強もするんだけど、天才肌の長谷川の教え方が抽象的すぎてとてもわかりにくい勉強会だった。
後半はもう途中の式の確認程度しか聞いていなかった。
相変わらず説明が下手な奴だ。

そして今日から学校が始まる。
いつもの場所で明子と会って学校へと向かう。
まだ8月ということもあって外は暑い。

「うへー。暑いよー」
「これやめなさい、そんなはしたない格好」

隣で暑い暑い言ってる明子がセーラー服のスカートをバフバフして風を送り込んでいる。

「まだスカートなんだからマシでしょ。男子とか見てみなよ」

そう言って私は近くの男子生徒を指さす。
制服は学ランだけど、夏服の場合は上を脱いで学校指定の白いポロシャツにズボンとなっている。

「そりゃズボンよりはいいけどさ、黒って熱吸収するんだよ？サウナ状態だよ？君子は熱くないの？」
「暑いに決まってるじゃん。ホワイトアルバムが使えたらどんなに嬉しいことか」
「はいはい。スタンドはわからないっちゅーの」
「あ、そっか」

つい長谷川と話すときのようにスタンドネタを入れてしまった。

慣れとは怖いものである。

「だから全巻貸してあげるって言ってるのに」
「私グロいのダメなんだってば。何回言えば納得してくれるのさ」
「ジョジョは全然グロくないよ？」
「だめだこりゃ」

呆れた明子は肩をすくめて笑う。
明子の攻略法はどこに存在するのかわからない。
あれこれ話をしながら歩いてるうちに学校についた。
いつものように玄関で靴を履き替え階段を上り約1ヶ月ぶりの自分の席に腰をかける。
しばらくして先生が来て朝のホームルームが始まった。

昼休み。
前の授業中から我慢していたらしいトイレに行った明子待っていたらケータイがブルブルと震えた。
長谷川からメールだった。

『吉野。もちついて下を見るんだ。』

なんのことかわからないけど、とりあえず深呼吸して落ち着いていた気分を更に整えて、かなり大きいスペースを下へ下へとスクロールして一番下に書いていた文字を読んだ。

『加藤が戻ってきた』

なんのことかわからなかった。
加藤って・・・正樹のこと？

とりあえず長谷川にメールをする。

『どういうこと？』

送るとすぐに返信が来る。

『前に二人で話したところまで来てくれ。照井も一緒で大丈夫だ』

『こちら吉野。了解した』

冗談かとも思ったけど、メールの文章がオタクらしくない長谷川のメールだったので信じてみる。

明子が戻ってくるのを待ってから前に長谷川と話したところに向かった。

「あー・・・私さっき見たわ。そっくりさんかと思ってたけど、まさか本物だったとは」

「照井も見たか。吉野は？」

「え、戻ってきたってそもそもどういうこと？」

「聞いた話によると俺のクラスじゃなくて１組に転校してきたみたいだ」

長谷川は同じクラスの元いじめっこたちが大騒ぎしているのを聞いて知ったらしい。

どうやら転校していたのは、親の単身赴任が原因で、その赴任期間が終わったからこんな中途半端な時期に戻ってきたらしい。

「多分吉野と照井のところには会いに来るだろうな」

「かもね」

「え？会いに来るの？だってもう別れてるんだよ？」

「そう思ってるのは吉野だけかもしれない。もしかしたら加藤は仲のよかった友達として会いにくるかもしれない」
「君子。もし会いに来たらどうする？」

珍しく明子が真剣な顔で聞いてくる。
私はどうする？
確かに自然消滅みたいなものだったから、まさきが別れていないと思っているかもしれない。
でも私はもう長谷川のことが好きだし・・・
キーンコーンカーン

「チャイムだ。戻るか。とりあえず吉野。帰りは玄関と玄関の真ん中のところで待っててくれ」
「う、うん。わかった！」

廊下をそそくさと戻っている時に、後ろを振り返って長谷川のクラスのさらに奥の1組のほうを見ると、こっちを見ていた正樹みたいな人と目があった。
ハッとしてすぐに目を反らしてしまった。
少しからだが震えたのが分かった。

夏休み終了（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると逆上がりができそうな気がします。

この話を最終章にしようかどうか、未だに悩んでます。
最終回は（頭の中に）出来てるんですが、なんかもったいないような気がして・・・

まぁとりあえずは次回も楽しみにお楽しみに！

青春パワー

放課後。

私は長谷川に言われた通りに、生徒同士の恒例の待ち合わせ場所である２つの玄関の間にやってきた。
私が到着したときには長谷川は既に待っていてくれた。
夏休み明けの学校で、長谷川と初めての待ち合わせをしたことになるのだが、まさかこんな形で待ち合わせすることになろうとは・・・
ちょっと複雑かも。
みんなは結構心配してくれてるみたいだけど、私は前とは違って強くなっていると思ってる。
だからこんなことをしなくてもいいと私は思ってる。

「お待たせー」
「おう。俺も今来たところだ」

片手を上げて長谷川に声をかけた私に、同じく片手を上げて長谷川も応えた。
うひゃー！なんか恋人同士っぽくていいかも！
なんかこの状況を楽しんでいけそうな気がしてきた。

「喜んでいるところ申し訳ないが、そろそろ帰らないか？」

どうやら楽しめそうなのは私だけみたい。
長谷川はまるでＳＰみたいな動きで私の手を引き歩きだした。
長谷川に引っ張られるようにして小走りで付いていく私。
校門の前まで引っ張られて気づいた。
なんか・・・なんか違う。

そう思ったら自然と足が止まった。
足を止めた私のことを不思議に思ったらしく、足を止めて私を振り返る長谷川。
「どうした？早く行かないと加藤が」
「ねぇ長谷川！」
私の声が長谷川の言葉を遮る。
他の生徒が不思議そうにこちらを見ながら歩いている。
今言わなきゃ。あとでなんて言えない気がした。
「あのね。私、明子と長谷川が心配してくれてるのはとても嬉しい。でもなんか違う」
「違うって何がだ？」
「なんか私も口ではうまく言えないんだけど、また正樹から逃げてるみたいで嫌だ」
「俺は吉野にもう悲しい顔をして欲しくないから・・・」
そう言って少しだけ表情を暗くして足元を見る長谷川。
もちろん長谷川が私のためにしてくれてるってことなのもわかってるつもりだ。
「長谷川。これは私の問題だから。私、長谷川に励まされて・・・いや、あれは励まされたのかどうかわかんないけど。アハハ。でもなんだかんだであの時長谷川がいなかったら、今の私は居なかったからもしれない。だからすごい感謝してる。普段はあんまりこーゆーこと言わないけど、明子にも感謝してる」
少し照れくさくなって頭をポリポリとかく。
よし。まだ余裕はある。

「だから私、今から正樹に会ってぶん殴ってくる！」

そうやって長谷川に向かって宣言すると、踵を返して玄関へと向かう。

長谷川が私の背中に何か言っていたが、もう聞いてやらない。

全部は正樹とのことが片付いてから聞いてやるつもりだ。

これで嫌われても仕方ない。私が悪いんだもん。

後悔は色々済んでからするもんだ。

だから今はとにかく一つの目標に向かって走ってやる！

それが今日の午後の授業中に、先生の話を聞かないで私が出した答えだった。

ちなみに明子にはもうこのとこを伝えてある。

きっと明子は正樹を捕まえていてくれているはずだ。

カバンからケータイを取り出す。

開いてみると、案の定メールが一件来ていた。

『犯人逮捕！現在1組の教室前で待機！』

さすが私の大親友。やることはやってくれる。

明子には今度何かおごってあげようと思う。３００円以内で。

長谷川と来た道を走って戻り、玄関で靴を履き替え、階段を1段飛ばしで駆け登る。

すれ違う人からは少し変な目で見られているような気もしたけど、どうせあと半年も無い付き合いだ。

今更変なキャラだと思われてもどうでもいい。

私も全然知らない人達ばっかりだし。

一気に階段を駆け登って、3年1組の教室がある2階へとたどり着いた。

いつもの癖というのは怖いもので、うっかりいつもと同じ階段、つ

まり1組とは反対の階段で登ってきてしまったので、廊下を反対側までダッシュする羽目になった。

「うぅっ・・・さすがに恥ずかしい・・・」

廊下にいた人たちの視線が私に集まる。
でもこのからだの奥底から沸き上がる青春パワーを止めることは誰にもできなかった。
もちろん私にも制御できなかった。
きっと最初で最後の大爆発になると思う。
そう考えるとテンションが上がってきた。

「加藤正樹っ！！」

一組の教室に着くなり、思わず溢れ出す青春パワーで正樹の名前を叫んでしまった。

「・・・君子？」

教室の中には、真ん中の机に腰を掛けてあっけに取られた顔の正樹と、教壇に立って腹を抱えて必死に笑いを堪えている大親友の明子だけしかいなかった。
ちらりと明子を見て、２００円以内の物をおごってやることに決めた。
そのまま正樹を見る。

「正樹。話したいことが山ほどあるんだ」
「だと思ってた。僕も照井さんに呼び出されたときに思った。覚悟を決めてきたからなんでも答えてあげるよ」

空気を読んで教室を出ていく明子。
教室は必然的に私と正樹だけの閉鎖空間となる。
少し悲しそうな顔をして話す正樹。
きっと罵られたり、殴られたり、踏んづけられたりすると考えていて、そんな顔をしているのかもしれない。
そして私は正樹に向かって口を開いた。

青春パワー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると感謝感激雨嵐です。

今回は続きが気になるように書いてみました。
次回の展開が気になるかもしれませんが、次回まで我慢しててください。

ではでは次回もお楽しみに！

決着

「正樹。私、正樹と会えて良かった」
「え？」
「明子以外に出来た友達だもん。そりゃ感謝もするよ」

そりゃ驚くよね。
いきなりお礼だもん。
でももちろんこれが本音な訳がない。
本番はここから。頑張れ私！

「遠距離でも付き合ってくれるって言われたとき、とても嬉しかった。ホントに気持ちが通じ合ってるような気がしてた。でも実際は全然気持ちは通じ合ってなかった」

そう。付き合ったものの、すぐに遠距離恋愛がスタートした。けど正樹のほうは付き合ってる自覚自体なかったのだ。
私は一人で勘違いして正樹と気持ちが通じ合っていると思って頑張って遠距離恋愛をしていた。

「私が連絡をしても、正樹がなかなか連絡をしてくれなくて落ち込んでいた時に、長谷川と出会った」
「長谷川って・・・」
「正樹の大阪にいた頃の友達の友達らしいよ」
「そっか・・・あの時の人か・・・」

正樹はハハッと苦笑すると頭をかいた。

「じゃあ全部長谷川くんに聞いたんだね」

「うん。正樹が付き合ってるつもりすらなかったことも、メールとかが重く感じてたことも色々聞いた。実際には聞いたっていうよりは聞かされたってほうが正しいかな」

今思うと、長谷川が教えてくれなかったら私ってどうなっていたんだろ？

「そのあと私は正樹に騙されてたって思うようになって部屋から出ない生活をしてたんだ」

あの時の自分はホントに病んでいたと思う。

「でもそんな時に励ましてくれたのが明子と長谷川だったんだ。もちろんお母さんとか妹とかも励ましてくれたけど。それから私は立ち直ることができて、こうして正樹と向き合うことが出来るくらいまで強くなった」

自分でも思うくらいに強くなった。

私の独白を聞いていた正樹が口を開いた。

「それで？ただ話すためだけにここに来たんじゃないんでしょ？」

「うん。一発殴らせて欲しい」

あの時、布団生活から立ち直った時からずっと決めていたことだった。

『正樹に会ったら一発ぶん殴る！』

そう心に誓うかのように強く生きてきた。

「そっか。僕殴られるのか・・・」

「ホントは穏便に無視でもして済ませようかと思ったんだけど、漫

画とかだとよくあるパターンだから、これもまたアリかなって思ってさ」

ホントに今日の私は自分じゃないみたいにスラスラと言葉が出てくる。

少し興奮しているのかもしれない。

「まぁなんか言われるとは思って覚悟はしてたけど・・・まさか君子が人を殴るって言い出すとは考えてなかったよ」

「私も変わったからね。人間、きっかけがあればいつでも変わることができるんだよ」

わかった、とだけ返事をして正樹は腰掛けていた机から立ち上がり、その場に仁王立ちした。

きっと私の覚悟を受け取ってくれたんだと解釈した私は、正樹の元まで歩み寄り、目の前に立った。

改めて近くで見た正樹は、去年の夏に引越しをした時からあんまり変わっていないように見える。

ずっと好きだった人。

遠距離でしかも片思いだった人。

でもそんな人と私は決着をつけようとしている。

目をつむり、心の中で自分に気合を入れる。

心の中で小さくカウントダウン。

5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・

『バチッ！！』

静かな教室に大きな音が響いた。

自分なりの精一杯の力で正樹の頬をひっぱたいた。

グーパンチはさすがに勇気がでなくて、代わりに渾身の平手打ちを

繰り出した。
人生初の平手打ちだったけど、いい感じで当たったみたいで、正樹は目を丸くして叩かれて首が横を向いたまま頬をさすっていた。
ビギナーズラックおそるべし。

「っつ・・・叩いてくれてありがとう。これで僕も次に進める気がするよ」
「そ、それはこっちのセリフ」
泣きそうになったけど、必死に堪えて言い返した。

「じゃあ。同じ学校だけど元気でね」

そう言って正樹は教室を出ていった。
あとに残された私は青春パワーが切れてしまったらしく、近くにあった椅子に崩れるように座った。
座ると、緊張が解けて急に涙が出てきた。

「うぅ・・・痛い」

気がつくと心臓がズキズキと痛い鼓動を繰り返していた。
それと一緒に痛覚も戻ってきたらしく、叩いた手がジンジンとして痛いような熱いような感じがした。
手を押さえて下をうつむいて涙を流した。

「人を叩くのはとても勇気がいることなんだ。吉野はよく頑張ったと思う」

ふと両肩に重さを感じたと同時に後ろから声がした。
振り向かなくても声の主は誰か分かっている。

こんなに背後に立つスキルが高い人物は一人しかいない。

「誰かえらい人が言ってた。誰かを叩くっていうことは、叩かれた人も痛いけど、叩いた人は心と手が痛くなるんだから2倍痛いんだ。だから誰かを叩くっていうことは覚悟のいることなんだって。だから吉野は頑張った」

どこかで聞いたことあるセリフだけど、長谷川のくせに良いことを言われた気がして、悔しくてさらに涙が出てくる。
長谷川にこんな泣きじゃくってるところを見せるのは正直恥ずかしかった。
左肩に乗せられている長谷川の手に自分の右手を重ねる。

「別に泣くのは恥ずかしいことじゃないと思うぞ」
「は、長谷川って心の声聞こえるの？」

嗚咽まじりの声だったから何言ってるかわからなかったかもしれないけど、長谷川は的確に返してくれた。

「俺は吉野のことが好きだ。だから吉野のことをよく見ているつもりだ。だから何となく仕草とかで考えていることはわかる・・・ようになりたい」

結局願望かよ。
それでも嬉しい。
長谷川が私のことを見ていてくれることが凄い嬉しい。
涙でぐしゃぐしゃだったけど、なんとなく笑みが溢れた。

「やっぱり吉野には笑顔が似合うよ」

両肩にあった手がそのまま降りてきて、後ろから長谷川に抱きしめられる形になった。
『顔も見てないくせに、どうして笑ったってわかるさ！』とか『教室に誰か入ってきたらどうするのさ！』とか『恥ずかしいからやめてよ！』なんてツッコミを言える勇気は私にはまだなかったみたいで、長谷川にされるがままだった。
すごく長谷川のことを好きになっている自分に気づいた。
そして長谷川も私のことを好きなんだと実感した。
心と手はまだ痛かったけど、私の中の何かが変わった気がした。
その両肩から伸びてきている腕を自分の両手で触る。

ありがとう長谷川。大好きだよ。

恥ずかしいので、長谷川に心の声が聞こえていないように祈りながら、心の中で告白した。

決着（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけるとトランザムできるかもしれません。

少し長くなってしまいました。
次回はこの回の舞台裏となります。

というわけで次回もお楽しみに！

親友として（明子視点）

加藤くんが戻ってきたという知らせを、長谷川くんから聞いた私はまた君子が壊れてしまうのかと思った。
教室に戻った私は、午後の授業中チラチラと君子のことを見ていた。
何か考え事をしているようには見えたけど、悩んで悩んで壊れそうという感じではなかった。
どうせ意味のわからない英語の授業だったから、机からルーズリーフを一枚取り出してスラスラと一行目に文字を書いた。
それを隣の席の君子に渡す。
いわゆる筆談と言うやつである。

『加藤くん戻ってきたらしいけどどう？』

紙を受け取りこっちを向いた君子にアイコンタクトで返事をすると、何かを書いていた君子から紙が戻ってきた。

『ちょっとビックリしたけどどうもしないよ？でもせっかくだから話はしたい』

予想以上に冷静みたい。
変に気を使っていた私と長谷川くんが変に見えるほどだった。

『もっと怖がってるかと思ってた』
『怖がっても仕方ないしね。強くなるって決めたし』
『強すぎるだろw』
『でも殴ってやりたいかな。過去形だけど怒ってたし』

聞き流していた授業が終わり、筆談を終了して直接君子と話した。

そして君子は長谷川くんの元へ、そして私は加藤くんを捕獲してくるという作戦を承った。
教室を出て加藤くんがいるはずの1組へと向かう。
帰宅する生徒達が珍しげに私を見てくるが、モブキャラの存在など全く気にせずに加藤くんだけに声をかけた。

「加藤くん」
「あ、照井さん！久しぶり！」
「ちょっとツラ貸せや」

どうしてあんな口調で言ってしまったのだろう。
今思い出すと凄い後悔している。
そんなこんなで私は加藤くんの捕獲に成功して、空気を完璧に読みきった1組の生徒達がそそくさと教室から出ていった。
1組のみんな！ありがとう！そして、ありがとう！
二人きりになった教室で私は教壇に立って君子にメールをする。
しばらくしてダダダダダっと廊下から足音が聞こえ、教室のドアが開いたと思ったら、

「加藤正樹っ！」

と全力で叫ぶ親友が現れた。
その姿に笑いがこみ上げてきて、吹き出しそうになったけど必死に腹を抱えて我慢する。
でもシリアスなシーンなのに笑うのもアレなので、さりげなく教室をでた。
廊下の壁に寄りかかって終わるのを待っていると、長谷川くんが息を切らして走ってきた。
あんなに必死な表情の長谷川くんは珍しかった。

「あれ？長谷川くんじゃん。なした？」
「吉野が加藤をぶん殴るって言って走っていったから追いかけてきたんだ」
「今教室の中だよ。でも入ろうとしたら私がぶん殴るけどね」
穏やかじゃない会話をしてファイティングポーズをとる私。
教室に入れないとわかって息を整えた長谷川に、ここまでの経緯を話した。

「そうか。決着か」
「なんか君子も強くなりたいんだってさ。ここは親友と彼氏として見守ってあげようよ」
「そうだな」

二人で廊下に座り込み、君子の話をしていると、教室の中から何かを叩いたような大きな音が聞こえた。
それからしばらくしないうちに、顔を押さえた加藤くんだけが教室から出てくる。
隣で座っていた長谷川くんが立ち上がり、加藤くんを見据える。

「加藤」
「長谷川くんか。久しぶりだね」

言うなり教室の中をチラリと見た加藤くん。
私はそれにつられるように中を見る。
教室の真ん中の席に座ってうなだれている君子の姿があった。

「俺は加藤を殴ってやりたいと思っていた。でもここで手を出してしまうと、吉野が頑張った意味が全く無くなってしまう」
「なんだ・・・付き合ってるんだ」

「あぁ。俺なら吉野にあんな顔はさせない」
「君なら出来そうだよ。僕は君ほど必死になれないもん」

そう言って私たちに背を向ける加藤くん。
それと同時に教室の中に入っていく長谷川くん。
二人のやりとりに唖然としてしまって出遅れてしまう私は、去っていく加藤くんをただ呆然と見ていた。
そして教室の中に目をやると、長谷川くんが椅子に座った君子を後ろから抱きしめていた。
とても入れる空気では無かったので、そのままカバンを置きっぱなしにしている自分の教室へと足を向ける。

「私も強くならなきゃなぁ」

少ししか残っていない生徒がいる廊下で静かに呟いた。
君子は凄い強くなった。
親友の君子はあんなに強くなったんだから、次は私の番かな。
あとになればなるほど、言いにくくなって直前まで言えない気がする。
でも自分で決めたことだから後悔はしてない。
君子もよく『後悔は後からするもんだ！』って言って本とか買ってるしね。
この際だから決めてしまおう。

「今日から一週間以内に君子には言おう」

なんか口に出して決意表明をすると緊張してきた。
妹ちゃんに言ったときはすごい残念そうな顔してたから、君子もそんな感じなのかなぁ？
でも今なら長谷川くんもいるから問題ないでしょ。

そう心でいろいろな決意をして、自分の教室に入っていく明子ちゃんなのでした。

親友として（明子視点）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

今回は明子視点で前回の舞台裏でした。
それでも長谷川はイケメンですねー

というわけで次回もお楽しみに！

『なんでもない』と『大丈夫』

夏休みが終わってから1週間が経った。
私と長谷川は夏休みの時以上に仲良くなっていた。
学校帰りも一緒に帰るし、昼休みには一緒にお弁当を食べたりもしている。
・・・って、そんなノロケ話がしたいんじゃない。
正樹のことがあってから明子の様子がおかしいのだ。
あの次の日、明子にお礼と２００円ぐらいのものを奢ってあげようかと思って話しかけた時だった。

「明子。昨日はありがとね。何か奢ってあげようかと思ってるんだけど、何がいい？」
「え？お礼なんていいよ。大したことしてないもん」

笑顔で言ってくれるのは明子らしい。
でも発言が全然明子らしくなかった。
いつもなら『えーと何買ってもらおうかなー♪今度出る新刊とか・・・』みたいな会話になるはずなのに、遠慮してくるなんて全然明子らしくない。
何かあったのかと思って長谷川に聞いてみたけど、特に心当たりはないとのこと。
家に帰って、明子ＬＯＶＥの一美にも聞いてみた。

「明子の様子が変なんだけど何か知ってる？」
「えっ！？明子さんがどうかしたの！？」
「ちょっと顔が近い！なんか最近考え事してるみたいでさ。何か知らない？」
「うーん・・・特に何もないかな。毎日してるメールもいつも通り

だし」
「・・・メル友だったんかい」
誰も何も知らない。
もしかして一人で抱え込んでるのかな？
だとしたらここは私の出番なんじゃないか？
あれだけ悩んでた私を励ましてくれた明子に恩返しをするチャンスだ！
そう考え始めたら居ても立ってもいられなくなった。
さらに次の日、明子に直接聞いてみた。

「なんか悩み事？」
「え？何もないよ」
「なんか最近明子変だよ？」
「そうかなぁ？ちょっと夜ふかししすぎたからそれかも」
「なんだ夜ふかしか。あんまり無理しちゃだめだよー」
「うん。ありがと」

その時の会話でわかったのは、明子は私に何かを隠しているということだった。
私もそうだけど、悩み事がある時は隠そうとしてしまう時がある。
『なんでもない』『大丈夫』
この二つは要注意ワードだ。
ごまかすのには最適な言葉だし、人は『なんでもない』とか『大丈夫』と言われてしまうと、なかなか踏み込みにくいものだと私は思う。
心に張ったＡＴフィールドを破るのが大変なのはアニメでも実証済みだ。
２次元でも難しいのに、３次元で簡単に破れるはずがない。
とりあえずはそっとして欲しいのかと思って、しばらく様子を見る

ことにした。
そして今。
未だに様子がおかしい明子が横の席で授業を受けている。
時折、小さくため息を吐いているのが可愛いのだけど、親友としては心配だ。
今日こそはATフィールド内に踏み込んでみよう。
もしかしたら簡単に中和出来るかもしれない。
長谷川にメールをして今日は一緒に帰れないことを伝える。

そして放課後。
明子に一緒に帰ろうと誘い、学校をあとにする。
校門を出た直後ぐらいに私は仕掛けた。

「明子さ。なんか悩み事あるでしょ」
「なんにもな・・・くはないかな」

意外とあっさり白状した。
白状っていう言い方は良くないな。
ATフィールドを中和してくれた、ということにしよう。

「で、何に悩んでるの？」
「うーん・・・ちょっと言いにくいんだけどさ。私、君子に言わなきゃいけないことがあるんだよね」

え？私に？何かしたっけ？
身に覚えがなさすぎる自分が怖い。

「・・・もしかして私なんかした？」
「いやいやいや！君子は何もしてないよ！」

あわててからだの前で両手を振る明子。
「ほら、最近君子強くなったじゃん？私も少し強くならなきゃなーって思ってさ」
「どーゆーこと？」
私から見たら明子は結構強いと思うんだけど、まだ強くなりたいのかな？
明子が少し悩んだ表情をしてから顔を上げた。
「・・・私ね。実は東京の専門学校行こうかと思ってるんだ」
少し震えた声で明子は言った。
東京の専門学校？
そう聞こえた気がした。
「え、ちょっと待って。なんで東京？北海道にもたくさん専門学校あるじゃん」
「そこの専門学校だと、近くに幼稚園とか保育所とかがあって、実習が多いんだよね。前から行ってみたいとは思ってたんだけど、東京だしって思ってて候補に入れてはいたけど行く気は無いって感じだったんだ。でも最近の君子見てたら、挑戦してみたくなってきてさ」
「だからって東京って・・・一人暮らしするの？」
「うちの親って共働きじゃん？だから仕送りとかはしてくれるって言ってるし、調べてみたら保育所のバイトみたいのもあるっぽいし」
明子の決意は硬そうだった。
そりゃ親友が決めたことだから応援してあげようとは思う。

でも東京って・・・

「私ね。君子のことが心配だったんだ」

「私？」

「うん。だって長谷川くんと会う前の君子って、加藤くんのこともあったしなんか危なっかしくてさ。でも今は長谷川くんもいるし大丈夫かなーって思ったんだ。だから思い切って東京とか行っちゃおうかなってさ」

私が原因って・・・私はなんて贅沢なんだ。

こんなに心配させてて、やっと決意できたことを邪魔するなんてできない。

私は親友として明子を応援したい。

明子の手を両手でつかむ。

「私応援するよ！東京に行っても私は明子の親友だしね！」

「あ、当たり前じゃん！私がせっかく出来た友達を無駄にするもんか！」

「なんで泣いてるのさ」

「そーゆー君子だって泣いてるじゃん」

「これは汗です！」

「汚いやつだ！」

今後来る別れの時に泣かないで笑えるように、思いっきり二人で抱き合って泣いた。

『なんでもない』と『大丈夫』（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変興奮いたします。

今回は明子との友情ストーリーでした。

次回もお楽しみに！

デートのお誘い

「吉野。今度の土曜日って何か用事あるか？」
「長谷川。私に用事があると思ってるの？それとも嫌味か何かですか？」

学校帰りに歩いていると、突然長谷川が予定を聞いてきた。
長谷川という彼氏はいるものの、学校が終わって家に帰ると勉強するか漫画読むかアニメ見るかのどれかしかない私に予定なんて存在する訳がない。
そんじょそこらのリア充と一緒にしないでいただきたい。
オタクなめんなよコノヤロー。

「よかった。今度の土曜日に映画見にいかないか？」

私からの嫌味を華麗にスルーした長谷川は、相変わらずの無表情でデートの申し込みをしてきた。
でも何の映画だろ？

「何の映画見に行くの？」
「遊戯王」
「あー！あの宣伝してるやつか」

歴代の主人公が3人とも出てくる映画か。
ＤＶＤが出たら見てみようと思ってたけど、まさか長谷川が行きたいと思っていたとは。
そのことを長谷川に伝えた。

「会場で配られるカードが欲しいんだ」

「何もらえるの？」
「Ｓｉｎ・レッドアイズだってさ」
「あの１０万もするカードを配っちゃうのか！」
「しかも時の魔術師を賭けてデュエルしなくても手に入るらしい」
「太っ腹だな」

なんでも長谷川はカードは欲しいけど、映画を一人で見に行くのが恥ずかしいから一緒に来て欲しかったみたい。
まったく変なところで恥ずかしがり屋なんだから。
そんなところが好きだったりするんだけどね。
でもデートはデートだしね。
すでにワクテカが止まりませんわ。

「で、どうだ？」
「もちろん行くよ。初めてのデートらしいデートじゃない？」
「そう言われればそうだな」
「そんなんじゃ女の子に嫌われるよ？」
「吉野はそんなことじゃ俺のことを嫌いになったりしないから大丈夫だ」

恥ずかしくてうつむいて歩く私。
どんだけ信頼してるのさ。
嫌いになるわけ無いじゃん。こんなに好きなのに。

「それにしても吉野は遊戯王も守備範囲なんだな」
「カードはやってないけどね。アニメは面白くて好き。結構ジャックとか好き」
「ジャックだと？あんなヒモ男のどこが好きなんだ？」
「社長とは逆のタイプじゃん？偉そうだけどバカでバカなところが好き」

「・・・そうか」
「長谷川は？」
「俺は城之内かな。あんな友達が欲しい」
「なかなかいないよね。あんないい人」
「たしかにな。俺は吉野がいればそれでいいけどな」
「ちょっ！なんでさっきからちょいちょいそーゆーこと言うのさ！」

思わず聞いてしまう。
今日の長谷川はすごくご機嫌だ。

「吉野はあんまり言われたくないタイプなのか？」
「いや、嬉しくないわけじゃないけど・・・恥ずかしいじゃん」
「そうか。ならよかった。気づいてるかもしれないが、本当は遊戯王の映画なんてただの口実だからな。デートに誘ってＯＫをもらって喜ばない奴なんかいないぞ」
「つまり長谷川は喜んでるということ・・・？」
「そういうことだ。とても土曜日が待ち遠しい」

ホントにこの無表情星人の考えてることはわかりにくい。
少しは表情に出しやがれってんだ！
ポーカーフェイスにも程があるわ。
長谷川がカジノのポーカーのディーラーとかやったら強そうだ。
そんな長谷川に振り回されてしまう自分も好きだ。
今日はノロケまくりだな。

「私も楽しみ」
「あ」
「なした？」
「吉野。あんまりオシャレしないでくれ」
「・・・はいはい。ってゆーか私もそんなにオシャレな服もってな

いわ」

互いに生粋のオタクなので服装は中の中ぐらいのレベルの服しかもっていないことは、夏休みの私服でバレバレだった。
変じゃなきゃいいんだよ。変じゃなきゃ。

「たとえ吉野がふんどしと鎧だけで来たとしても、嫌いにはならないから安心しろ」
「その時点で私自身が一番怖いわ！」

誰が好んで全身鎧のフルメイル装備で行くか。

「私も長谷川がオレンジ色の胴着を着て来たとしても、好きな気持ちは変わらないよ」
「！？」
「・・・どうしたの？」

長谷川が口をポカンと開けて目を丸くして立ち止まった。
もしかして私が変なこと言ったから怒った・・・とか？

「・・・吉野がデレた」
「はぁ？」
「吉野がついにデレた！まさかこんな形でデレるとは！俺は嬉しいぞ、吉野！！」

いつもの無表情とストーカー時代の満面の笑みを足して2で割ったような顔をする長谷川。
長谷川がそのままの勢いで抱きついてくる。
急に抱かれてあわわわと混乱する私。
デレたって・・・長谷川に好きって言ったこと無かったっけ？

「吉野！大好きだ！！」
「ちょ、ちょっと！そんな大声出さないでよ！」
今までにないような大声で告白してくる。
長谷川どうしたし！
ストーカーの時もテンション高い人だったけど、今回のはまたちょっと違う気がした。
テンションが上がりすぎて暴走してる感じ。
長谷川の胸の中でべしべしと叩くと、落ち着きを取り戻したらしくゆっくりと放してくれる。

「だ、大丈夫？」
「大丈夫だ！一番良い吉野をもらったから大丈夫だ！」
「子どもかよ！」
「今まで吉野が好きって言ってくれたことなかっただろ？」
「そうだっけ？・・・って告白したときに言ったじゃん」
「あれ以外でって意味だ。別に言われなかったから寂しいとか悲しいとかではなかったんだが、実際に言われるとこんなに嬉しいものなんだな！」

いきいきとした無表情で興奮冷めやらぬといった感じの長谷川が拳を作って熱く語る。
こんな時にアレだけど・・・キモイな。

「そう言われてみたらいつも心の声で留めていたような・・・」
「思ってることは口に出したほうがいいぞ！俺も嬉しいし！」
「じゃあ・・・言ってもいいの？」
「おう！思いの全てをぶつけてくれ！」

そう言って両手を広げる長谷川。

「なんかここまでテンションの高い長谷川ってキモイね」

「・・・」

長谷川の表情がどんどん冷めていき、両手両膝をついて地面に崩れた。

冗談のつもりだったのにここまで落ち込むなんて・・・

「吉野。俺はどうしたらいいんだ？」

「そんな長谷川も大好きだよ」

冷めてしまった無表情に再び熱が戻ってきたらしく、私の隣に立ち上がる長谷川。

「そろそろ帰ろうか。吉野さん」

「キャラぐらいは設定してから立ち直ってください」

結局ボケてるのか素なのかわからなかった。

でもそんな長谷川も大好きだから困る。

デートのお誘い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

次回もお楽しみに！

映画

土曜日。
私と長谷川は映画館に来ていた。
駅と直結のショッピングビルの上のほうにある映画館を選んだ。
チケットを窓口で購入し、カードを受け取って、今ポップコーンを買うための列に並んでいる。
私は別にカードはいらなかったから、そのまま長谷川にプレゼント。
喜んで受け取り財布の中にしまう長谷川。
意外と雑だな。

「ポップコーン食べるの久しぶりだ」
「私も久しぶりかも。ってゆーか映画を見るのも久しぶりかも」

多分最後に見たのは・・・小学生？多分そのくらい前だと思う。
たいていの映画は家でＤＶＤとかでレンタルで見ることが多い。

「俺は前にポケモンの映画見に来たな」
「鳴海さん？」
「そうだ。いい歳して恥ずかしいらしい」
「人のこと言えないじゃん」
「でもあれは恥ずかしかったな。周りは小さい子ばっかりだったからな。それに比べてこっちは大きいお友達が多いから、あんまり恥ずかしさを感じない」
「昔からのファンか、カードやってる人が多いもんねー」

ちなみに私は昔からのアニメのファンだ。
あのブロックに挟まれるトンガリ頭の彼には敬意を表したい。

「俺はただ単にアニメで出てくるカードを持っていたいだけだからな。そーゆー意味ではアニメファンデありカードのファンでもある」
「コレクターってやつかね？」
「まぁよくわからんが遊戯王は好きってことだ」

ポップコーンを購入した私たちは、映画が始まる時間ということもあり、指定の上映場所へと向かった。

「やばかったな」
「うん。やばかった」

正直なところ、漫画みたいな展開（ポップコーンを取るときに手が触れたり的なアレ）があるかと思ってたけど、それどころじゃないぐらい面白くて見入ってしまった。
その証拠にポップコーンがまだ半分ぐらい残っている。

「なんか・・・凄かったな」
「うん。凄かった」

さっきから二人してこの調子である。
圧倒的迫力！
まるで会話にならないけど、窓口のあるロビーで並んで椅子に腰をかけて、ムシャムシャと残ったポップコーンを食べている。

「これってデートなのか？」

ふいに長谷川が口を開いた。

だけどポップコーンを食べる手は止まらない。

「デートなんじゃない？」

「俺が思い描いていたデートとは少し違う気がするんだが・・・」

「どういうのを思い描いてたの？」

長谷川の思考に少し興味があった。

いや、もともと興味が無いとかそんなんじゃないからね？好きな人を知りたいと思うのは当然のことだと思う。うん。そういうことだ。

「なんかキャッキャウフフしながら街を歩いてウインドウショッピングして、ちょっと遅めのお昼を食べて暗くなってきたら夜景を見てから帰る。そんな感じを想像してた」

「ブハッ！！ゲホゲホッ」

痛い！

長谷川が変なことを言うからポップコーンが変なところに入った。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃない。大問題だ」

「そんなに苦しいのか？何か飲み物買ってくるか？」

「そこは大丈夫！問題なのは長谷川の頭だ」

「俺の・・・頭？」

「なにその理想は。私たちがそんなリア充になれるわけがなかろう！」

「・・・たしかに！！」

長谷川は無表情ながらも、雷に打たれたような表情になる。

前から言っているように、私たちは生粋のオタクだ。

故に、リア充と呼ばれる人間たちの行動が理解できない。

それを真似るなんてとてもじゃないが・・・きっと死人が出るぞ。

「そうだったのか・・・吉野に借りた漫画には、そんなことをしているカップルがいたから、それが普通なのかと思っていた」

「漫画と現実は違うのだよ。漫画の世界ではたいていがリア充だから真似ると大変になる」

「どうして吉野はそんなに説得力があるんだ？」

「漫画の中にはイケメンがいるけど、現実にはいないからね。それで色々と悟った気がしてた」

もう何を言っているのかよくわからない。

長谷川も何気にこの流れに乗ってくるから収拾がつかなくなってきた。

ツッコミ役が欲しいところだった。

その時。

「あれ？君子？」

知った声が聞こえた。

声がした方を見ると、親友の明子が立っていた。

なんでこんなところに？

「明子さんお待たせしまし・・・た・・・」

後ろからパタパタと駆け寄ってきたのは、我が妹の一美だった。

小走りの一美と目があった瞬間、私の目の前まで瞬間移動したかのように素早く移動し、私を立たせて明子と長谷川から少し離れた位置に移動する。

一瞬時が飛んだのかと思った。

そして明子達からは見えないように少し屈んで話す。
「なんでお姉ちゃんがこんなところにいるの！？」
「私は映画を・・・。それより一美こそなんでこんなところにいるのさ」
「映画館に来たならすることは一つじゃん」
胸を少しだけ張って言う一美。
効果音を付けるなら『エッヘン！』かな。
「もしかして明子を誘ってきたの？」
「もちろん！」
「・・・あんた何気に行動力あるよね」
同じ姉妹とは思えないほどの行動力を見せつけてくる。
「お姉ちゃんこそあの人誰なのさ」
「長谷川は私の彼氏だよ」
改めて口に出して言うと少し照れくさいな。
「やっぱり彼氏かー」
「あれ？見たことあったっけ？」
「お姉ちゃんが引きこもってた時と夏休みに来た人でしょ？」
「あーそっか。その時会ってたか。でもその時はまだ付き合ってなかったんだけどねー」
「そうなんだ。お母さんとかに紹介したら喜びそう」
「でもお父さんは泣きそうだね」
アハハと笑っていると明子がブーブー言ってきたので、一美は明子

の元へと戻っていく。
入れ替わるように長谷川が私の元へと歩いてくる。

「あの二人付き合ってるらしいぞ」
「まぁ一美のほうは明子大好きだからいいんじゃない？・・・って付き合ってるの！？」
「あぁ。照井が『今日は妹ちゃんとデートなんだ』って言ってた」
「デートしてるからって付き合ってるとは限らないでしょ・・・」
「でも照井は吉野の妹が自分に好意があるのに気づいていたぞ？両思いだろ？」

えー。
私はどうリアクションしたらよいのだろうか？

映画（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかあれば書いていただけると大変恐縮ですが前宙とかできそうです。

さて次回から少しテンポが早くなります。
・・・投稿のペースではなくて、作品ないの時間の速さの話ですよ？
というわけで次回もお楽しみに！

受験勉強

秋も深まり気味な１０月下旬。
夕飯を食べ終わった私は、家でセンター試験に向けて勉強をしていた。
『吉野の成績なら今までの過去問を繰り返し解いていけば大丈夫だろ』と先生に言われていたので、少し自信はあったけど、念には念を入れてひたすらケアレスミスを減らすための勉強を繰り返している。
長谷川は推薦を狙うようで、放課後は面接の練習とかに励んでいた。
先生から少し笑顔が足りないと言われて困っていた。
鳴海さんに面接の練習を付き合ってもらっているとの噂。
その鳴海さんはゲームを作るのが夢だったらしく、そっち系の専門学校を志願している。
明子は東京の専門学校に出願して、１１月の後半に面接のため一度東京に行くって言ってた。
各自が目標に向かって頑張っている。
私と長谷川の関係だけど、以前健全で穏やかなお付き合いを続けてます。
でもさすがにこの時期になってくると、受験の話とかが多くなってきてしまって、あまりデートらしいデートをしていない。
だからと言って長谷川のことを考えていないわけじゃない。
勉強中にふと集中が途切れてしまったら、すぐに長谷川のことを考えてしまう。
そんな時はメールをしたりして我慢しないようにしている。
そこは長谷川も同じなのか、時々長谷川からもメールや電話がくる時もある。
そして今も机の済に置かれたケータイがオラオラと鳴っていた。
赤いケータイを開いて確認してみると、予想通り長谷川からの電話

だった。

「もしもし」

『あぁ！こちらジャックバウワーだ！大統領は無事か！？』

長谷川からの電話は毎回変な内容の出だしで始まる。

「日本に大統領はいませんが私は無事です。どーぞー」

『なにぃ！大統領がいないだと？じゃあ俺は誰を守れば・・・うわっ！やめろ！あー！・・・・・・もしもし。長谷川です』

「今回のは何？」

面白かったけど相変わらずよくわからない内容だったので、笑いながら聞いてみた。

『今回のはあの有名な海外ドラマのマネをしてみた』

「全然会話になってなかったけどね」

『まぁそう細かいことは気にするな。適当にやってるだけだ』

「今日はどうしたの？」

『特に意味はない。ただ単に吉野の声が聞きたくなっただけだ』

嬉しいことを言ってくれるじゃないか。コノヤロー。

まぁ毎回この質問をするとこうやって答えてくれるんだよねー。

しかもそれを聞きたいがために質問をしていると言っても過言ではない。

相変わらずのノロケでごめんなさい。

『今大丈夫だったか？』

「うん。いつも通り過去問やってた」

『そうか。順調？』

「結構順調だよ。8割ぐらいが平均になってきたし」
『目指せ満点だな』
「長谷川は？」
『俺は勉強は大丈夫なんだが、面接が難しい。緊張すると焦ってしまうからどうしても困ってしまう』
「そこは練習あるのみだもんねー」
『心理学科目指してるんだから何かアドバイスしてくれてもいいんじゃないか？』

そう言われて自分の部屋の本棚を見る。
今まではオタク関連の本ばっかりだったけど、今は心理学の本も本棚の隅にいくつか入っている。

「手のひらに『人』って書いてたくさん飲み込んだら落ち着くらしいよ」
『わかった。もしそれで緊張したら吉野のせいだからな』
「なにそれ。人のせいにしないでくださいー」

二人で電話越しにアハハハと笑う。

『じゃあそろそろ切るかな』
「うん。頑張ってね。おやすみ」
『吉野も頑張りすぎるなよ。おやすみ』
「・・・長谷川。大好き」

こちらから切る直前にボソリとつぶやく。
素直に気持ちを伝えて気合を入れ直したところで、ケータイを机の元あった場所に置いて勉強を再開する。
と思ったら、またケータイが鳴り始めた。
音が『ザ・ワールド！』なのでメールのほうだった。

『最後のはなんだ！？凄い嬉しい！（＊´∀｀＊）勉強できねーｗｗ』

長谷川からのメールだった。
頑張ってくれるかと思ったら逆効果だったみたいだ。
とりあえず返信する。

『逆効果だったかＯＴＬ　勉強頑張りなさいｗｗ』

すぐに返信が来る。

『超頑張るしｗｗ明日テストなら満点確実だべ、（＊´∀｀）ノ』

返信はせずにそのままケータイを閉じた。
あんなに喜んでくれるなんて、可愛いやつめ。
そんな長谷川が大好きすぎて困る。
普通逆なんじゃないか？と思う時もあるけど、人それぞれなので、
私と長谷川の関係はこんな感じなのだ。
普通じゃなくたっていいじゃない。
だって人間だもの。
そんなことを考えながら面接と受験前には、長谷川に『好き』と言ってみることにした君子であった。

受験勉強（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

さて。
最終回が近づいてきました！←え

次回もお楽しみに！

受験戦争閉幕

なんやかんやで受験が終わった。
みんな見事に合格した。
明子は東京の専門学校、鳴海さんはゲームデザイナーの専門学校、
長谷川は北海道で一番ランクの高い大学、私は希望していた大学。
春には全員がバラバラの学校へと進んで行くことになる。
まぁ元々鳴海さんは違う学校だったわけだけどね。
私と長谷川の関係は以前と全く変わらない。
そりゃ少しは進展があったりも無かったりもしたけど、それなりにいい関係を続けている。
正直もう少し進展があってもいいとは思っているけれど、そこは高校生で受験生だからというのもあるかもしれない。
長谷川は私のことをとても大事にしてくれている。
長谷川は推薦で合格を決めたから結構早い段階から受験戦争から離脱出来ていたけど、私はセンターも本試験もちゃんと受けての合格だったから、長谷川とは少しずれる形になった。
その時も私から連絡をしない限りは連絡をしてこなかった。
時々メールはしてきたけども、夜の勉強時間とかに送られてくることはなかった。
それでも私とコミュニケーションを取れないのは辛いのか、学校で昼休みに一緒にご飯を食べようと誘ってくることもしばしばあった。
学校は何かない限り一緒に帰ってはいたけど、お互いに何か物足りないような気はしていた。

そして今日。
受験という鎧を脱ぎ捨てて長谷川と久しぶりのデートだ。
長谷川の『待ち合わせをしたい』という要望があり、同じ駅で電車に乗るにも関わらず、あえて街中での待ち合わせにした。

集合時間は正午０時。
太陽は一番高いところにあるが、気温はまだ高くない時期だ。
色々と暦では春とか言われているけど、辺り一面白さが残っている街並みを見ると、北海道の冬の遅さを感じずにはいられない。
とかちょっと真面目なことを考えたりしながら待ち合わせ場所へと向かう。
待ち合わせ時間までまだ１０分ぐらいある。
駅の改札を出て、５分もかからない距離での待ち合わせだから、待ち合わせ時間には十分間に合う。
ちなみにデートプランは長谷川が決めてきてくれるらしい。
少しワクテカしている。

「お？あれかな？」

待ち合わせの場所を見ると、長谷川らしき人物がすでに来ていた。
少し小走りで長谷川に近づく。

「長谷川早いね。待った？」
「いや、今来たところだ」
「じゃあ同じ電車だったのかなぁ？」
「・・・・・・」

少し残念そうな顔をする長谷川。
何か変なこと言ったかな？
そういえば少しづつだけど、長谷川の表情がわかるようになってきた。
今回みたいに少し残念な時は眉の両端が少しだけ下がる。
ホントに間違い探し並みの変化だけど、見慣れてくるとわかるようになった。

「・・・そうかもしれないな」

少し間があってから長谷川が答える。
絶対何かあったんだ。私がさりげなく地雷を踏んだのかもしれない。

「ちょっと！今の間は何？なんかあるなら言ってよ！」
「・・・じゃあ言わせてもらおう。俺が待ち合わせをしたかったのはさっきのやりとりをしてみたかったからなんだ」
「さっきのやりとり？」

そう言って自分が体験していた出来事を思い起こす。
そしてやっと気がつく。

「そーゆーことか！」
「わかっていただけただろうか？」
「わかりました」
「ならデートを始めようか」

そう言って私の手を引いて歩き出す長谷川。
いきなり手を握られたもんだから少しビックリしたけど、慌てて長谷川の隣に追いついて並んで歩く。
今日の長谷川はいつもより積極的だな。
そんなにデートをするのが楽しみだったのだろうか？
ちなみに私は、今日のことを考えすぎてついつい夜ふかしをしてしまうほど楽しみだった。
遠足の前の日は寝れなくなるタイプです。

「そういえば今日はどこ行くの？」
「まずは腹ごしらえだ」

そう言って連れてこられたのは、前に鳴海さんと三人で来たオムライス屋さんだった。
あれ以来来ていなかったので少しテンションが上がった。
元々マックスに近いぐらい上がってたのは内緒。
メニューを聞きに来た店員さんに注文を終えて、食べ物が来るのをしゃべって待つ。
しばらくして両手に注文したオムライスを持った店員さんがやってきて、それぞれの前に置く。
私のはトマトソースっぽいソースがかかったオムライス。
長谷川のは前回と同じ天津飯・・・じゃなくてあんかけオムライス。

「長谷川ってそれ好きだよねー。前もそれじゃなかった？」
「ホントに美味しいんだってば。食べてみるか？」
「え？いいの？」
「もちろん。ほれ、アーン」

スプーンにすくって私の方に向けてくる。
これって・・・うわっ！ちょっと恥ずかしい！
そんなことを思っていても、長谷川はすごく楽しそうな顔をしてるから断ることなんてできないし、私も嬉しくて死んでしまいそうなぐらい嬉しい。
ドキドキと鼓動している心臓を飛び出ないように気を付けながら、向かいの長谷川が差し出したスプーンへと口を近づけた。
口の中に広がるあんかけの風味はとても美味しかった。

「どうだ？美味しいか？」
「うん！おいひい！」

まだ口の中をモゴモゴとさせる私に聞いてくる。
ホントに嬉しそうな顔してるな。

そんな長谷川の顔を見ながら私は、今日のデートを精一杯楽しもう
と心に誓ったのであった。

受験戦争閉幕（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

「なんやかんや」って便利な言葉ですね。
というわけで最終章です。

次回もお楽しみに！

テレビ塔

オムライスでお腹を満たした私たちは第2のポイントへと向かっていた。
なんとなくだけど歩いていてどこに向かっているのか分かってきた。
外は寒いから地下道を歩いているんだけど、北海道のオタクならこの道順だけでどこに向かっているのか分かってしまう。
私もオタクの端くれとして、あのお店自体は明子とよく言っていたのでこの道は知っていた。

「私どこに行くかわかった」
「さすが吉野。ここは地下から行こうとしたらよく通るもんな」

こんな意味の無い会話ばっかりかもしれないけど、手をつないで歩いているだけで楽しい。
長谷川の声を聞いているといつもより弾んでいるので、きっと同じような気持ちなのだろう。
てくてくと地下を歩いて、地上に出るための階段を登り、目的の場所へと歩いていく。

「到着だ」
「やっぱりここだったか」

目の前には青い看板のアニメショップがある。
しかしなかなか店の中に入ろうとしない長谷川。
横目で長谷川の顔を見て、私はピンときた。

「ねぇ長谷川？」
「なんだ？」

「ここをデートのスポットとして選ぶってどうなの？」
「まぁ俺も思ったんだ。でも正直、吉野とどこに行けばいいのかわからなかったから、オタクっぽいところを選んでしまった。こんな俺を許してくれ」

ここまで考えてくれた長谷川を叱ることはできない。
かと言って他に行きたいところがあったわけでもないので文句は言えない。
あ、そうだ！

「テレビ塔登ってみない？」
「テレビ塔？」

テレビ塔とは札幌の街中を突っ切っている縦長の大きな公園である、大通公園の一丁目に存在している電波塔である。
いつの間にか存在していたゆるキャラ（？）の『テレビ父さん』のモデルとなった建物だ。
中からエレベーターで登ることが出来て、展望台まで登ることができる。
私は登ったことが無かったので登ってみようかと思ったわけだ。

「長谷川は登ったことある？」
「いや、地元民はあんまり登らないだろ」
「だよねー。でもあえて登るのがデートっぽくていいじゃん！」

そうだな、と言ってテレビ塔へと足を向ける。
そう遠くない距離を歩いてテレビ塔の真下に到着。

「私、ここに立ったの初めてかも」
「俺も初めてだな」

テレビ塔は観光スポットにもなっているので、お土産を売っている場所がある。
そこにはこれでもかというぐらいのテレビ父さんのグッズ売られていた。

「こいつって人気なのか？」
「私に聞かれても・・・多分ｏｎちゃんとかのほうが人気あるんじゃない？」
「そうだよな。おっと・・・この話はここまでにしよう」
「・・・そうだね」

店番をしているらしいおばちゃんが凄い目つきでこちらを睨んでいた。
私たちはエレベーターの近くで展望台へと行ける券を購入して上を目指した。
こーゆーところの値段って地味に高いよね。
そして展望台に到着。

「「うおー！」」

初めて見たテレビ塔の光景に、思わず感嘆の声を上げる私たち。
人間ってなんで高いところに来るとテンションが上がるんだろう？

「吉野！ここ地上から９０Ｍもあるらしいぞ！」

長谷川が説明文を読みながら私を呼ぶ。

「「ビミョー！」」

思わずハモってしまい、二人して笑う。
ホントになんで人間って高いところに来ると以下略。

「他に誰も居ないから貸切みたいだな！」

こんなにテンションが高いのにはもう一つ理由があった。
私達以外誰もいないのである。
これだけ開放的な状況だと、テンションが上がるのもうなずける。

「なぁ。吉野の家はあのへんか？」
「いや、ここからじゃ見えないでしょ」
「だいたいだよ。俺の家はあのへんだ」

長谷川は指をさしているが、私の家と方角が変わらないので、さっきと同じ方向をさしているように見える。
その長谷川がからだをすこし動かして指の方向を変える。

「あれが俺の通う大学だ」

長谷川が指すのは街の中心地になかなか広い敷地を構えている、難関というよりも『目標は高く設定しましょう』と言われた時に書くような有名大学だ。
あんな超有名で難関な大学に、すんなりと推薦で入れてしまう長谷川のスペックに驚いた。

「吉野が通うのは・・・あそこらへんか？」
「多分ね」

だいたいの方角を指さして言う。
私の通う大学は、今住んでいるところからさらに街の中心地から離

れる位置にある。
これから長谷川と会う機会って減っていくのかなぁ？
なんか少しさみしいな。
そう考えていると、オタトークをしながら下校していたのがとても懐かしく思えてきた。

「吉野」

ふと呼ばれて長谷川のほうを見ると、私を見ていた長谷川と目が合う。
相変わらずの無表情だけど、目を見ていると吸い込まれそうな感じがしてくる。
吸い込まれているのかと思うくらい長谷川の顔が近づいてきて、私の唇に温かいものが触れた。
そして長谷川の顔が離れていく。
何をされたのかわからず、一瞬固まってしまったが、それが長谷川の唇だったことに気がつくのにはさほど時間が掛からなかった。

「・・・！？ちょっと！長谷川っ！」
「大丈夫。誰も見てないから」
「そ、そうじゃなくて！」
「何か問題でもあったか？」
「わ、私、ファーストキスだったんだけど・・・」
「大丈夫だ。問題ない。俺も初めてだ。だからすごく緊張したしドキドキした」
「え、あ、いやー・・・」

そういう問題じゃなくて・・・
私、はじめてのキスを棒立ちで目開けっぱなしで終えたことになるんですけど。

そのことを長谷川に伝えた。

「そういうことか。それは悪いことをした。ならもう一回しよう」

また長谷川の顔が近づいてくる。

そのまま唇が触れ合ったけど、さっきのチュッって感じではなく長いキスだったので、ビックリしたけど、私は目をつぶって二回目のキスを味わうことができた。

互いの顔が離れた時に長谷川の後ろにはテレビ塔から見える絶景が広がっていた。

まるで空を飛んでいるかのような気分だった。

「また来ようね」

「あぁ」

おしまい。

テレビ塔（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかありましたら書いていただけると幸いです。

さて。なんやかんやで長かった（？）このシリーズもこれで最終回となります。
応援していただいた皆様ありがとうございます。
今後の二人の幸せを祈っててください。

次回はまた違う作品になるかと思いますが、その時はその時でまた応援から悪口まで色々とよろしくお願いします。
ではまたどこかでー

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7054y/

遠距離女としつこい男

2011年12月24日10時50分発行